



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第198集

岡 部 町

砂 田 前 遺 跡

一般国道17号（交通安全事業簡易パーキング）
新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 8

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



砂田前遺跡遠景



砂田前遺跡全景（調査区は第3図参照）



第30号住居跡カマド



第43号住居跡



第52号住居跡出土遺物



第79号住居跡出土遺物

序

埼玉県における道路網は、県民生活の多様化と地域の活性化、産業活動の円滑化などに対応するために、一般国道・県道の拡充・整備が進められてきました。

県の5か年計画の中でも、県内一時間道路網構想を目指した道路網の整備が盛り込まれており、国道のバイパス整備などが図られております。

このたび建設省により交通安全施設等整備事業が実施されることとなり、一般国道17号に、道の駅「おかべ」が整備されることとなりました。道の駅は、道路網の整備に伴って増加しているドライバーの方々に、道路をより安全・快適に利用していただくために生まれた施設です。駐車場、休憩所にとどまらず、地域の文化、歴史、名産などの魅力を紹介する情報発信基地として、また、地域とドライバーの方々をつなぐふれあいの場として、大変注目されております。

岡部町大字岡に所在する砂田前遺跡は、その一部が道の駅「おかべ」新設用地内に所在しており、その取り扱いについては関係諸機関が慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は、当事業団が埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、建設省大宮国道事務所の委託を受け実施いたしました。

埼玉県北部に位置する岡部町は、丘陵、低地と起伏に富んだ地形を有し、自然環境に恵まれた街でもあります。歴史的に見ても、県の指定史跡である「中宿古代倉庫群跡」をはじめ数多くの重要な遺跡が知られて

います。また、岡部六弥太忠澄などの中世武士団を輩出した地としても有名です。

砂田前遺跡の所在する場所は、昔から水田として利用されてきましたが、その地中からは古墳時代後期の大集落が発見されました。隣接する一般国道17号深谷バイパス関連の調査例などを含めると、実に200軒以上の住居跡群になり、当時のままの姿でカマドに据えられた甕や、滑石製の白玉が多量に発見されました。

また発掘調査の成果を公開する遺跡説明会では、400人以上もの住民の方々においでいただき、関心の高さも知られるところとなりました。

これらの多くの成果をまとめたものが本書であります。埋蔵文化財の保護、教育普及さらには学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました建設省大宮国道事務所、岡部町教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は埼玉県大里郡岡部町に所在する、砂田前遺跡に関する発掘調査報告書である。
所在地：大里郡岡部町大字矢島道695-2番地他
文化庁指示通知 教文第2-29号
2. 発掘調査は一般国道17号（交通安全事業簡易パーキング）新設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査と整理・報告書作成の期間および担当者は下記のとおりである。
平成6年7月1日～平成7年3月31日
鈴木秀雄・赤熊浩一・渡辺清志・佐藤康二
平成7年4月1日～平成7年7月31日
赤熊浩一・佐藤康二
4. 出土品の整理および図版の作成は資料部資料整理第二課の佐藤が担当し遠山実生の協力を得た。
第Ⅵ章1の縄文時代の遺物実測・説明の大半は渡辺清志が行った。
5. 遺構写真は発掘担当者が、遺物写真は佐藤が撮影した。
6. 遺跡の基準点測量および航空写真は(株)東京航業研究所に、火山灰分析・植物珪酸体分析は(株)古環境研究所に、出土土器の胎土分析は(株)第4紀地質研究所に、巻頭カラー写真（遺物）は、小川忠博氏にそれぞれ委託した。
7. 岡部町教育委員会が発掘調査した調査区については全測図の提供をはじめ町教委から多大なる御協力を頂いた。
8. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、その他は佐藤が行った。
9. 本書の編集は、当事業団資料部長、同副部長の監修のもとに資料部資料整理第二課の佐藤が行った。
10. 本書に掲載した資料は、埼玉県立埋蔵文化財センターが平成10年度以降管理・保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の各氏から御教示・御協力を賜った。（敬称省略、五十音順）
麻生 優 糸川道行 岡部町教育委員会
岡本東三 酒井清治 坂本和俊 坂爪久純
外山政子 鳥羽政之 服部敬史 服部久美
平田重之 宮本直樹 地元関係者各位

凡例

1. 本書におけるX、Yによる座標数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

2. グリッドは、北から南へA～P、東から西へ1～18とふり、10mを1単位とし、北西隅の杭名称を用いた。

3. 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構：住居跡 掘立柱建物跡 土壌 1/60

カマド 1/30

遺物： 縄文時代土器 1/4

縄文時代土器拓影 1/3

古墳時代土器 1/4

古墳時代土製品 1/2

その他のものに関しては、スケールおよび縮尺率等をその都度表記して示した。

4. 本書における遺構の略号は原則として以下のとおりである。

住居跡=S J 掘立柱建物跡=SB 土壌=SK

溝跡=SD 性格不明遺構= SX

5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。

6. 遺構図中のスクリーントーンは凡例のとおりだが例外はその都度表記した。

7. 遺構図・遺物分布図中に示したドットは出土位置及びに接合関係を示し、ナンバーは遺物実測図のそれと一致する。またドットの種類は以下のとおりである。

● 土器 ■ 土製品(勾玉・土錘等)

□ 金属器・石製品(管玉等) △ 編物石

8. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

・法量の()内の数値は推定値であり、[]内の数値は擬口縁の現存値を示し、単位はcmである。

・胎土は土器に含まれる含有物を以下の記号に示した。

A：白色針状物質 B：角閃石 C：白色粒子

D：石英 E：長石 F：雲母 G：赤色粒子

H：黒色粒子 I：チャート J：片岩

・焼成は4ランクに分類した。

A良好 B普通 Cやや不良 D不良

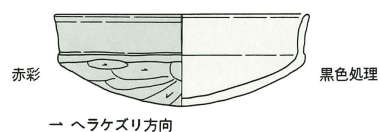
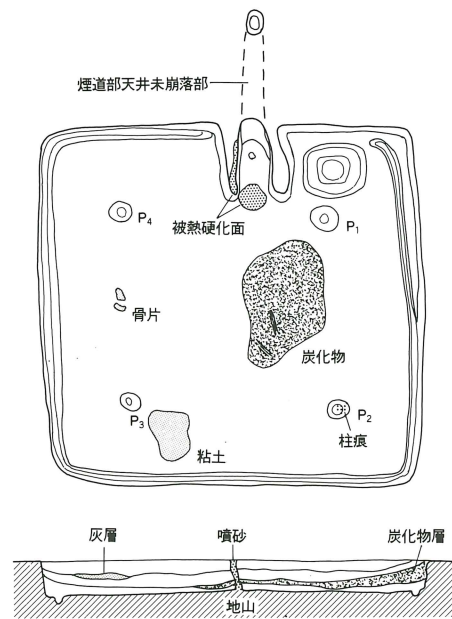
・色調は『新版標準土色帳』(農林省水産技術会議事務局監修1967)に照らし最も近似した色相を記した。

・残存率は5%刻みで表したが、破片の場合、図で示した残存部位に対するもので必ずしも全体に占める残存率を表示していない。

・遺物実測図中のスクリーントーンは凡例の通りだが、例外はその都度表記した。

・実測図中の→印はヘラケズリの方向を示す。

・実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。



目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(10) その他の住居跡	259
1. 発掘調査に至る経過	1	(11) 掘立柱建物跡	278
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(12) 土壙	282
3. 発掘調査・整理報告書刊行事業の組織	3	(13) ピット	284
II 遺跡の立地と環境	4	(14) 溝跡	287
III 遺跡の概要	8	(15) グリッド・表採遺物	306
IV 発見された遺構と遺物	12	V 発掘調査の成果と課題	309
1. 縄文時代の遺構と遺物	12	1. 古墳時代後期の土器編年	309
2. 古墳時代の遺構と遺物	25	2. 編物石	315
(1) 古墳時代前期遺物集中区	25	3. 住居跡	316
(2) 古墳時代住居跡群	29	4. カマド	316
(3) 第1住居跡群	30	5. 集落動態	319
(4) 第2住居跡群	56	6. 住居跡計測一覧表	323
(5) 第3住居跡群	93	7. 編物石計測表	326
(6) 第4住居跡群	132	附 篇 自然科学的分析	329
(7) 第5住居跡群	181	1. 砂田前遺跡の火山灰分析	329
(8) 第6住居跡群	210	2. 砂田前遺跡の珪酸体分析	332
(9) 第7住居跡群	230	3. 砂田前遺跡出土土器胎土分析鑑定報告	335

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	4	第36図	第18号住居跡	46
第2図	周辺遺跡分布図	6・7	第37図	第18号住居跡出土遺物(1)	47
第3図	周辺遺跡・調査区位置図	9	第38図	第18号住居跡出土遺物(2)	48
第4図	砂田前遺跡全体図(1)	10	第39図	第16号住居跡	49
第5図	砂田前遺跡全体図(2) (1/800)	11	第40図	第16号住居跡出土遺物	50
第6図	縄文時代遺物分布概略図	12	第41図	第25・68号住居跡	52
第7図	第87号住居跡	13	第42図	第25号住居跡カマド	53
第8図	第87号住居跡遺物分布図	14	第43図	第25号住居跡出土遺物	54
第9図	第87号住居跡出土遺物(1)	16	第44図	第2住居跡群全体図	56
第10図	第87号住居跡出土遺物(2)	17	第45図	第22号住居跡	57
第11図	I・J7グリッド遺物集中区	19	第46図	第22号住居跡出土遺物	58
第12図	I・J7グリッド出土遺物(1)	20	第47図	第23号住居跡	59
第13図	I・J7グリッド出土遺物(2)	21	第48図	第23号住居跡出土遺物	60
第14図	グリッド出土遺物(1)	23	第49図	第20号住居跡	61
第15図	グリッド出土遺物(2)	24	第50図	第20号住居跡カマド	62
第16図	古墳時代前期遺物分布概略図	25	第51図	第20号住居跡出土遺物	63
第17図	K-7グリッド遺物集中区	26	第52図	第30号住居跡	64
第18図	L-7グリッド遺物集中区	27	第53図	第30号住居跡遺物分布図	65
第19図	古墳時代前期の遺物	28	第54図	第30号住居跡カマド	66
第20図	住居跡群分割図	29	第55図	第30号住居跡出土遺物	67
第21図	第1住居跡群全体図	30	第56図	第37号住居跡	68
第22図	第12号住居跡・出土遺物	31	第57図	第37号住居跡遺物分布図	69
第23図	第19号住居跡・出土遺物	32	第58図	第37号住居跡カマド	70
第24図	第15号住居跡	34	第59図	第37号住居跡出土遺物(1)	71
第25図	第15号住居跡出土遺物	35	第60図	第37号住居跡出土遺物(2)	72
第26図	第17号住居跡・出土遺物	36	第61図	第45号住居跡・カマド	73
第27図	第14号住居跡	37	第62図	第45号住居跡遺物分布図	74
第28図	第14号住居跡出土遺物	38	第63図	第45号住居跡出土遺物(1)	75
第29図	第13号住居跡・カマド	39	第64図	第45号住居跡出土遺物(2)	76
第30図	第13号住居跡出土遺物	40	第65図	第56号住居跡	77
第31図	第46号住居跡	41	第66図	第56号住居跡遺物分布図	78
第32図	第21号住居跡	42	第67図	第56号住居跡カマド	79
第33図	第21号住居跡出土遺物	43	第68図	第56号住居跡出土遺物(1)	80
第34図	第24号住居跡	45	第69図	第56号住居跡出土遺物(2)	81
第35図	第24号住居跡出土遺物	46	第70図	第56号住居跡出土遺物(3)	82

第71図	第42号住居跡・カマド	84	第108図	第40号住居跡カマド	127
第72図	第42号住居跡遺物分布図	85	第109図	第40号住居跡出土遺物	128
第73図	第42号住居跡出土遺物(1)	86	第110図	第10号住居跡・出土遺物	129
第74図	第42号住居跡出土遺物(2)	87	第111図	第11号住居跡	130
第75図	第42号住居跡出土遺物(3)	88	第112図	第11号住居跡カマド・出土遺物	131
第76図	第42号住居跡出土遺物(4)	89	第113図	第4住居跡群全体図	133
第77図	第50号住居跡・出土遺物	92	第114図	第41号住居跡	134
第78図	第71号住居跡	92	第115図	第41号住居跡遺物分布図	135
第79図	第3住居跡群全体図	94	第116図	第41号住居跡カマド	136
第80図	第59・36号住居跡	95	第117図	第41号住居跡出土遺物(1)	137
第81図	第59号住居跡出土遺物	96	第118図	第41号住居跡出土遺物(2)	138
第82図	第36号住居跡出土遺物	97	第119図	第41号住居跡出土遺物(3)	139
第83図	第67号住居跡	99	第120図	第38号住居跡	141
第84図	第67号住居跡出土遺物(1)	100	第121図	第38号住居跡カマド	142
第85図	第67号住居跡出土遺物(2)	101	第122図	第38号住居跡出土遺物	143
第86図	第34号住居跡	102	第123図	第65号住居跡	144
第87図	第34号住居跡カマド	103	第124図	第65号住居跡カマド	145
第88図	第34号住居跡出土遺物	104	第125図	第65号住居跡出土遺物(1)	146
第89図	第52号住居跡・カマド	105	第126図	第65号住居跡出土遺物(2)	147
第90図	第52号住居跡遺物分布図	106	第127図	第27号住居跡・出土遺物	149
第91図	第52号住居跡出土遺物(1)	107	第128図	第28号住居跡	150
第92図	第52号住居跡出土遺物(2)	108	第129図	第28号住居跡カマド	151
第93図	第52号住居跡出土遺物(3)	109	第130図	第28号住居跡出土遺物	152
第94図	第52号住居跡出土遺物(4)	110	第131図	第58号住居跡・出土遺物	153
第95図	第9号住居跡	112	第132図	第5号住居跡・カマド	154
第96図	第9号住居跡遺物分布図	113	第133図	第5号住居跡遺物分布図	155
第97図	第9号住居跡出土遺物	114	第134図	第5号住居跡出土遺物(1)	156
第98図	第6号住居跡・カマド・遺物分布図	115	第135図	第5号住居跡出土遺物(2)	157
第99図	第33号住居跡・カマド	116	第136図	第57号住居跡	159
第100図	第33号住居跡出土遺物	117	第137図	第57号住居跡カマド	160
第101図	第29号住居跡	118	第138図	第57号住居跡出土遺物(1)	161
第102図	第29号住居跡遺物分布図	119	第139図	第57号住居跡出土遺物(2)	162
第103図	第29号住居跡出土遺物(1)	120	第140図	第8号住居跡・カマド	163
第104図	第29号住居跡出土遺物(2)	121	第141図	第8号住居跡出土遺物	164
第105図	第39号住居跡・カマド	123	第142図	第26号住居跡	165
第106図	第39号住居跡出土遺物	124	第143図	第26号住居跡遺物分布図	166
第107図	第40号住居跡	126	第144図	第26号住居跡カマド	167

第145図	第26号住居跡出土遺物(1) ……………	168	第182図	第49号住居跡カマド……………	208
第146図	第26号住居跡出土遺物(2) ……………	169	第183図	第49号住居跡出土遺物……………	209
第147図	第26号住居跡出土遺物(3) ……………	170	第184図	第6住居跡群全体図……………	211
第148図	第7号住居跡……………	172	第185図	第78号住居跡・出土遺物……………	212
第149図	第7号住居跡カマド・出土遺物……………	173	第186図	第77号住居跡・出土遺物……………	213
第150図	第2号住居跡・鉄滓分布図・カマド……………	174	第187図	第74号住居跡・カマド……………	214
第151図	第2号住居跡出土遺物……………	175	第188図	第74号住居跡出土遺物……………	215
第152図	第43号住居跡……………	176	第189図	第82号住居跡・カマド……………	216
第153図	第43号住居跡遺物分布図……………	177	第190図	第82号住居跡出土遺物……………	217
第154図	第43号住居跡カマド……………	178	第191図	第83号住居跡……………	218
第155図	第43号住居跡出土遺物(1) ……………	179	第192図	第83号住居跡遺物分布図・カマド……………	219
第156図	第43号住居跡出土遺物(2) ……………	180	第193図	第83号住居跡出土遺物(1) ……………	220
第157図	第5住居跡群全体図……………	182	第194図	第83号住居跡出土遺物(2) ……………	221
第158図	第48号住居跡・カマド・出土遺物……………	183	第195図	第55号住居跡・出土遺物……………	223
第159図	第47号住居跡……………	184	第196図	第84号住居跡・出土遺物……………	224
第160図	第47号住居跡出土遺物……………	185	第197図	第81号住居跡……………	225
第161図	第53号住居跡……………	186	第198図	第81号住居跡カマド……………	226
第162図	第53号住居跡出土遺物……………	187	第199図	第81号住居跡出土遺物……………	227
第163図	第35号住居跡……………	188	第200図	第80号住居跡……………	228
第164図	第35号住居跡カマド……………	189	第201図	第80号住居跡遺物分布図・カマド……………	229
第165図	第35号住居跡出土遺物……………	190	第202図	第80号住居跡出土遺物……………	230
第166図	第69号住居跡……………	191	第203図	第7住居跡群全体図……………	231
第167図	第69号住居跡遺物分布図・カマド……………	192	第204図	第3号住居跡・出土遺物……………	232
第168図	第69号住居跡出土遺物(1) ……………	193	第205図	第31号住居跡……………	233
第169図	第69号住居跡出土遺物(2) ……………	194	第206図	第31号住居跡出土遺物……………	234
第170図	第70・91号住居跡……………	196	第207図	第32号住居跡……………	235
第171図	第70号住居跡出土遺物……………	197	第208図	第32号住居跡カマド……………	236
第172図	第44号住居跡・カマド……………	198	第209図	第32号住居跡出土遺物……………	237
第173図	第44号住居跡出土遺物……………	199	第210図	第75号住居跡・カマド……………	238
第174図	第54号住居跡……………	200	第211図	第75号住居跡出土遺物……………	239
第175図	第54号住居跡遺物分布図・カマド……………	201	第212図	第79号住居跡・カマド……………	240
第176図	第54号住居跡出土遺物(1) ……………	202	第213図	第79号住居跡遺物分布図(1)・(2)……………	241
第177図	第54号住居跡出土遺物(2) ……………	203	第214図	第79号住居跡出土遺物(1) ……………	242
第178図	第61号住居跡カマド……………	204	第215図	第79号住居跡出土遺物(2) ……………	243
第179図	第61号住居跡……………	205	第216図	第79号住居跡出土遺物(3) ……………	244
第180図	第61号住居跡出土遺物……………	206	第217図	第85号住居跡・出土遺物……………	246
第181図	第49号住居跡……………	207	第218図	第86号住居跡……………	247

第219図	第86号住居跡出土遺物	248	第252図	土壌 (第1～15号)	283
第220図	第73号住居跡・カマド	250	第253図	土壌出土遺物	284
第221図	第73号住居跡出土遺物	251	第254図	G-9グリッドピット列配置図	284
第222図	第1号住居跡	252	第255図	G-9グリッドピット列	284
第223図	第1号住居跡遺物分布図	253	第256図	I-8グリッドピット列配置図	285
第224図	第1号住居跡カマド	254	第257図	I-8グリッドピット列	285
第225図	第1号住居跡出土遺物(1)	255	第258図	C・D-7・8グリッドピット群	286
第226図	第1号住居跡出土遺物(2)	256	第259図	溝跡配置図	287
第227図	第90号住居跡・出土遺物	256	第260図	第2・20・21・22号溝跡	288
第228図	第72号住居跡	257	第261図	第1号溝跡	290
第229図	第72号住居跡カマド・出土遺物	258	第262図	第1号溝跡出土遺物	291
第230図	第51号住居跡・出土遺物	260	第263図	第4・18・23・26・27号溝跡 ・第18号溝跡出土遺物	293
第231図	第51号住居跡カマド	261	第264図	第3・5号溝跡	295
第232図	第66号住居跡	262	第265図	第3・5号溝跡出土遺物	296
第233図	第66号住居跡遺物分布図・カマド	263	第266図	第7・8・15・17・19号溝跡	268
第234図	第66号住居跡出土遺物(1)	264	第267図	第1号性格不明遺構	299
第235図	第66号住居跡出土遺物(2)	265	第268図	第8号溝跡エレベーション	299
第236図	第62号住居跡	266	第269図	第7号溝跡出土遺物	300
第237図	第62号住居跡遺物分布図	267	第270図	第6・11・12・13・14号溝跡(1)	302
第238図	第62号住居跡カマド	268	第271図	第6・11・12・13・14号溝跡(2)	303
第239図	第62号住居跡出土遺物(1)	269	第272図	第6号溝跡出土遺物	304
第240図	第62号住居跡出土遺物(2)	240	第273図	第9・10・25号溝跡・第9号溝跡出土遺物	305
第241図	第64号住居跡	271	第274図	グリッド出土遺物(1)	306
第242図	第64号住居跡出土遺物	272	第275図	グリッド出土遺物(2)	307
第243図	第63号住居跡	273	第276図	第4住居跡群を中心とした土器編年表	310・311
第244図	第63号住居跡出土遺物	274	第277図	模擬杯の変化傾向	312
第245図	第60号住居跡・出土遺物	276	第278図	編物石の重量と大きさ	315
第246図	第89号住居跡・出土遺物	277	第279図	住居跡の時期別規模	317
第247図	第1号掘立柱建物跡	278	第280図	住居跡の時期別主軸方向	317
第248図	第2・3号掘立柱建物跡	279	第281図	煙出しピットを有するカマド	318
第249図	第4号掘立柱建物跡	280	第282図	時期別遺構分布図	320・321
第250図	第5号掘立柱建物跡	280	第283図	住居跡計測部凡例	323
第251図	第6号掘立柱建物跡	281			

図版目次

- 図版1 砂田前遺跡航空写真（南から）
砂田前遺跡航空写真（北から）
- 図版2 砂田前遺跡全景
E～I-16～18グリッド全景
- 図版3 第87号住居跡遺物出土状況
第87号住居跡全景
- 図版4 I・J-7グリッド縄文土器出土状況
K-7グリッド古墳時代前期遺物出土状況
- 図版5 第1住居跡群 第3・4住居跡群
- 図版6 第1・3住居跡群 第5住居跡群
- 図版7 第19号住居跡全景 第19号住居跡遺物出土状況
第15号住居跡全景 第17号住居跡全景
第14号住居跡全景 第13号住居跡全景
- 図版8 第13号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状況
第13号住居跡遺物出土状況
第46号住居跡全景 第21号住居跡全景
第21号住居跡カマド遺物出土状況
第24・21号住居跡全景
- 図版9 第18号住居跡遺物出土状況 第16号住居跡全景
第25号住居跡全景 第25号住居跡カマド
第22号住居跡全景 第23号住居跡全景
- 図版10 第23号住居跡カマド 第20号住居跡全景
第20号住居跡カマド遺物出土状況
第20号住居跡編物石出土状況
第37号住居跡遺物出土状況
第37号住居跡遺物出土状況
- 図版11 第30号住居跡遺物出土状況 第30号住居跡全景
- 図版12 第30号住居跡カマド遺物出土状況
第30号住居跡カマド遺物出土状況
第30号住居跡遺物出土状況
第30号住居跡カマド 第56号住居跡土層
第56号住居跡遺物出土状況
- 図版13 第56号住居跡遺物出土状況
第56号住居跡全景
- 図版14 第45号住居跡全景 第45号住居跡遺物出土状況
第45号住居跡遺物出土状況 第50号住居跡全景
第42号住居跡カマド土層
第42号住居跡カマド遺物出土状況
- 図版15 第42号住居跡遺物出土状況 第42号住居跡全景
- 図版16 第42号住居跡白玉出土状況
第42号住居跡遺物出土状況 第36号住居跡全景
第67号住居跡全景
第67号住居跡カマド遺物出土状況
第34号住居跡全景
- 図版17 第52号住居跡全景 第52号住居跡遺物出土状況
第52号住居跡遺物出土状況 第52号住居跡カマド
第52号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第9号住居跡全景
- 図版18 第6号住居跡全景 第33号住居跡全景
第33号住居跡カマド 第29号住居跡全景
第29・33号住居跡遺物出土状況
第39号住居跡全景
- 図版19 第40号住居跡全景
第40号住居跡カマド遺物出土状況
第10号住居跡全景 第11号住居跡全景
第11号住居跡カマド・貯蔵穴
第38号住居跡全景
- 図版20 第41号住居跡全景
第41号住居跡カマド遺物出土状況
- 図版21 第41号住居跡遺物出土状況
第41号住居跡貯蔵穴A遺物出土状況
第41号住居跡管玉出土状況 第65号住居跡全景
第65号住居跡カマド
第27号住居跡遺物出土状況
- 図版22 第28号住居跡全景 第58号住居跡全景
第5号住居跡全景 第5号住居跡遺物出土状況
第57号住居跡全景
第57号住居跡カマド遺物出土状況
- 図版23 第57号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 第8号住居跡
第26号住居跡全景 第26号住居跡遺物出土状況

- 第26号住居跡カマド遺物出土状況
第26号住居跡P 2 遺物出土状況
- 図版24 第7号住居跡全景 第2号住居跡全景
第2号住居跡遺物出土状況
第43号住居跡P 2 半裁状況
第43号住居跡P 4 半裁状況
第43号住居跡P 4 柱痕確認状況
- 図版25 第43号住居跡遺物出土状況
第43号住居跡全景
- 図版26 第48号住居跡全景
第47号住居跡遺物出土状況
第53号住居跡全景 第35号住居跡全景
第35号住居跡カマド
第35号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- 図版27 第44号住居跡全景 第54号住居跡遺物出土状況
第54号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状況
第61号住居跡全景 第49号住居跡全景
第78号住居跡全景
- 図版28 第78号住居跡全景 第77号住居跡全景
第74号住居跡全景 第82号住居跡全景
第82号住居跡遺物出土状況 第83号住居跡全景
- 図版29 第83号住居跡遺物出土状況 第81号住居跡全景
第81号住居跡カマド遺物出土状況
第80号住居跡遺物出土状況 第3号住居跡全景
第3号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- 図版30 第1号住居跡遺物出土状況 第1号住居跡全景
- 図版31 第1号住居跡遺物出土状況
第1号住居跡粘土検出状況
第31号住居跡遺物出土状況 第32号住居跡
第32号住居跡全景 第72号住居跡全景
- 図版32 第72号住居跡カマド 第73号住居跡全景
第73号住居跡カマド 第75号住居跡全景
第79号住居跡上層遺物出土状況
第79号住居跡土層
- 図版33 第79号住居跡下層遺物出土状況
第79号住居跡カマド・貯蔵穴遺物出土状況
- 図版34 第79号住居跡全景 第79号住居跡土層
- 第79号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
第79号住居跡カマド・貯蔵穴
第85号住居跡全景 第86号住居跡全景
- 図版35 第51号住居跡全景 第66号住居跡遺物出土状況
- 図版36 第51号住居跡カマド・貯蔵穴
第51号住居跡カマド
第66号住居跡P 1 遺物出土状況
第62号住居跡遺物出土状況
第62号住居跡勾玉出土状況 第64号住居跡全景
- 図版37 第64号住居跡貯蔵穴
第64号住居跡P 5 遺物出土状況
第63号住居跡遺物出土状況 第60号住居跡全景
第89号住居跡全景 住居跡発掘状況
- 図版38 第2号掘立柱建物跡 第1号溝跡遺物出土状況
第1号溝跡遺物出土状況 第9号溝跡
第9号溝跡遺物出土状況 第6号溝跡
- 図版39 第6・7・8号溝跡 第6・11・12号溝跡
- 図版40 第1号性格不明遺構航空写真
第6・11～14号溝跡航空写真
- 図版41 第87号住居跡出土遺物
- 図版42 第87号住居跡出土遺物
- 図版43 I-J-7グリッド・グリッド出土遺物
- 図版44 I-J-7グリッド・グリッド出土遺物
- 図版45 古墳時代前期の遺物
- 図版46 古墳時代前期の遺物
第19・15・17・14号住居跡出土遺物
- 図版47 第14・13号住居跡出土遺物
- 図版48 第13・21・18号住居跡出土遺物
- 図版49 第16・25号住居跡出土遺物
- 図版50 第25・22・23号住居跡出土遺物
- 図版51 第23・20・30号住居跡出土遺物
- 図版52 第30号住居跡出土遺物
- 図版53 第30・37号住居跡出土遺物
- 図版54 第37号住居跡出土遺物
- 図版55 第37・45号住居跡出土遺物
- 図版56 第45号住居跡出土遺物
- 図版57 第45号住居跡出土遺物

- 図版58 第56号住居跡出土遺物
 図版59 第56号住居跡出土遺物
 図版60 第56号住居跡出土遺物
 図版61 第56号住居跡出土遺物
 図版62 第56・42号住居跡出土遺物
 図版63 第42号住居跡出土遺物
 図版64 第42号住居跡出土遺物
 図版65 第42・50・59・36号住居跡出土遺物
 図版66 第67号住居跡出土遺物
 図版67 第67・34号住居跡出土遺物
 図版68 第52号住居跡出土遺物
 図版69 第52号住居跡出土遺物
 図版70 第52号住居跡出土遺物
 図版71 第52・9号住居跡出土遺物
 図版72 第9・33・29号住居跡出土遺物
 図版73 第29号住居跡出土遺物
 図版74 第29・39号住居跡出土遺物
 図版75 第40号住居跡出土遺物
 図版76 第10・11・41号住居跡出土遺物
 図版77 第41号住居跡出土遺物
 図版78 第41号住居跡出土遺物
 図版79 第41・38号住居跡出土遺物
 図版80 第41・38・65号住居跡出土遺物
 図版81 第65・28号住居跡出土遺物
 図版82 第28・5号住居跡出土遺物
 図版83 第5・57号住居跡出土遺物
 図版84 第57号住居跡出土遺物
 図版85 第57・8・26号住居跡出土遺物
 図版86 第26号住居跡出土遺物
 図版87 第26号住居跡出土遺物
 図版88 第26号住居跡出土遺物
 図版89 第26・7・43号住居跡出土遺物
 図版90 第43・48号住居跡出土遺物
 図版91 第48・47号住居跡出土遺物
 図版92 第47・53・35号住居跡出土遺物
 図版93 第35・69号住居跡出土遺物
 図版94 第69号住居跡出土遺物
 図版95 第69・70号住居跡出土遺物
 図版96 第44号住居跡出土遺物
 図版97 第54号住居跡出土遺物
 図版98 第54号住居跡出土遺物
 図版99 第54・61号住居跡出土遺物
 図版100 第61・49号住居跡出土遺物
 図版101 第49号住居跡出土遺物
 図版102 第77・74号住居跡出土遺物
 図版103 第77・74・82・83号住居跡出土遺物
 図版104 第83号住居跡出土遺物
 図版105 第83・81号住居跡出土遺物
 図版106 第81・80・3・31号住居跡出土遺物
 図版107 第31・32号住居跡出土遺物
 図版108 第32・75号住居跡出土遺物
 図版109 第75・79号住居跡出土遺物
 図版110 第79号住居跡出土遺物
 図版111 第79号住居跡出土遺物
 図版112 第86・73号住居跡出土遺物
 図版113 第1号住居跡出土遺物
 図版114 第1号住居跡出土遺物
 図版115 第72・90・51・66号住居跡出土遺物
 図版116 第66・62号住居跡出土遺物
 図版117 第62号住居跡出土遺物
 図版118 第62・64・63号住居跡出土遺物
 図版119 第63・89号住居跡出土遺物
 図版120 第63号住居跡 第1・5号溝跡
 グリッド出土遺物
 図版121 グリッド 第29・42号住居跡出土遺物
 図版122 第42号住居跡出土遺物 貝巢穴痕泥岩
 図版123 土錘
 図版124 土錘
 図版125 第3・5号溝跡出土遺物 管玉 土玉 編物石
 図版126 編物石
 図版127 甕底部木葉痕
 図版128 植物珪酸体の顕微鏡写真

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれている。東京に隣接する地理的關係から都心に向かう車両の渋滞が慢性化し、これまでの道路整備はこうした渋滞の解消を目的とした、円滑な交通の「ながれ」に重点をいれてきた。

一方、駐車や休憩といった「たまり」の機能については今後の課題とされてきたが、建設省では平成3年度からの交通安全施設等整備事業において、新たに一般道路の休憩施設の整備に取り組んできた。こうした休憩施設と市町村等の整備する各種の地域振興施設とを一体化し、これを「道の駅」と呼んで地域の特性を活かした情報の発信基地とする試みが、いくつかの地域で行われてきた。このような計画の主旨を受けて、建設省大宮国道事務所では、一般国道17号の岡部町の当該地点を「道の駅」として、一体的な整備を図ることとした。この区域はまた岡部町が、平成3年3月に発

掘された中宿遺跡の復元施設を中心とする、遺跡公園の整備を行う計画地にも隣接している。

「道の駅」事業計画の範囲には岡部町大字岡矢島道に所在する砂田前遺跡が所在し、その取扱いについて建設省と文化財保護課とで協議を重ねてきた。協議の結果、遺跡の現状保存は困難であり、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査については実施期間である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と建設省、文化財保護課の三者で調査期間・調査経費等について協議した。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法第57条第1項の規定に基づく発掘調査届が文化庁長官あてに提出された。この届けに対する指示通知番号は次のとおりである。

平成7年5月1日付け 教文第2-29号

調査は平成7年7月31日をもって、終了した。

(埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

砂田前遺跡の発掘調査は、平成6年7月1日から平成7年7月31日にかけて行われた。調査面積は11,000㎡であった。

平成6年7月1日から発掘調査の準備を始め、8月中頃までにプレハブの設営等を行った。

平成6年度調査区の重機による表土掘削も7月から開始したが、周辺の水田には引水がなされており、湧水の影響が顕著であった。そのためやむを得ず調査区際に排水溝を掘削し、水中ポンプにより強制排水しながら表土掘削を行った。

8月中頃から本格的な調査に着手したが、確認面からも湧水し、作業は難航した。やむを得ず調査区際からの調査を諦め、中央部の比較的乾燥している箇所から遺構確認・覆土除去を行った。しかし住居跡床面を検出するよりも早く湧水したため、水中ポンプを住居跡内に設置し、強制排水を行いながら調査を進めた。10月以降は周辺の水田から水が引き、順調に調査が進捗した。

平成6年10月12日には県教育長の視察、10月26日には県の文教常任委員会の視察を受けた。

平成7年3月11日には岡部町教育委員会の共催のもと、現地説明会を実施した。この説明会は折しも復元中であった県指定「中宿古代倉庫群跡」および同時期に町教委、当事業団が調査を行っていた岡部町熊野遺跡と本遺跡を巡回するものであった。前夜の残雪の中、460人以上を越える参加者を得、遺跡への関心の高さが伺えた。

平成7年3月には本年度の調査区の調査を終了し、ヘリコプターによる航空写真撮影および航空測量を実施した。

平成6年度の調査面積は6,600㎡、検出した遺構は住居跡80軒等である。出土遺物はコンテナ約250箱に上った。

平成7年度4月からは前年度から引き続き、住居跡10軒等を調査し、6月後半からは前年度未買収地区で

あった調査区東端の調査に着手した。しかし周辺の水田には水が引かれており、重機による表土掘削、遺構確認等は困難を極めた。数カ所に水中ポンプを設置し、調査を進めた。

7月末までに調査をすべて終了した。平成7年度の調査面積は4,400㎡で住居跡10軒、溝跡10条等を調査した。出土遺物はコンテナ約20箱であった。

(2) 整理作業

整理作業は平成8年4月1日から平成10年3月31日までの2カ年実施した。

平成8年4月から図面整理を中心に行い、並行して出土遺物の分類と接合を行った。

4月～7月は各グリッドごとに記録した図面を遺構毎に整理した。また出土遺物の分類・接合は密集する遺構毎に順次進め、およそ20軒の接合が終了した。

8月～11月は平面図と断面図を照らし合わせ、航空測量を参考に二次原図の作成に着手した。出土遺物の接合はおよそ20軒進捗した。また遺物の実測図作成に着手した。

12月～3月は引き続き二次原図の作成を行った。出土遺物の接合はおよそ20軒進捗した。遺物実測図のトレースに着手した。

平成9年4月～7月は引き続き遺構の二次原図を作成し、完成したものから順次トレースを行った。遺物の接合は6月後半にすべて終了し、遺物の実測図作成を進めた。

8月～11月は遺物実測、遺構図のトレースが11月に終了した。遺物実測個体数は総計2000個体であった。10月からはトレースの終了した遺構図、遺物実測図の図版作成を始めた。遺物の中で、写真撮影を実施するものを選定し、着色を実施した。11月前半におよそ600点の遺物の写真撮影を実施した。11月後半から原稿執筆を開始した。

12月～1月には図版作成、原稿執筆が終了し、ページの割付けを行った。写真図版作成が終了した。

平成10年1月後半から報告書の印刷に入り、校正を行った後、3月31日に本報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査 (平成6・7年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 富田 真也
 専務理事 栃原 嗣雄 (H6)
 吉川 國男 (H7)
 常務理事兼
 管理部長 加藤 敏昭 (H6)
 新井 秀直 (H7)
 理事兼
 調査部長 小川 良祐
 <管理部>
 庶務課長 及川 孝之
 主査 市川 有三
 主任 長滝 美智子
 主事 菊池 久
 専門調査員兼
 経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二
 <調査部>
 調査部副部長 高橋 一夫
 調査第一課長 坂野 和信
 主任調査員 鈴木 秀雄 (H6)
 主任調査員 赤熊 浩一
 調査員 渡辺 清志 (H6)
 調査員 佐藤 康二

(2)整理・報告書刊行 (平成8・9年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 富田 真也
 専務理事 吉川 國男 (H8)
 塩野 博 (H9)
 常務理事兼
 管理部長 稲葉 文夫
 理事兼
 調査部長 小川 良祐 (H8)
 梅沢 太久夫 (H9)
 <管理部>
 庶務課長 依田 透
 主査 西沢 信行
 主任 長滝 美智子
 主任 菊池 久 (H8)
 主任 腰塚 雄二 (H9)
 専門調査員兼
 経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二 (H8)
 主任 菊池 久 (H9)
 <資料部>
 資料部長 梅沢 太久夫 (H8)
 谷井 彪 (H9)
 主幹兼
 資料部副部長 谷井 彪 (H8)
 小久保 徹 (H9)
 専門調査員兼
 資料整理第二課長 鈴木 敏昭 (H8)
 村田 健二 (H9)
 調査員 佐藤 康二

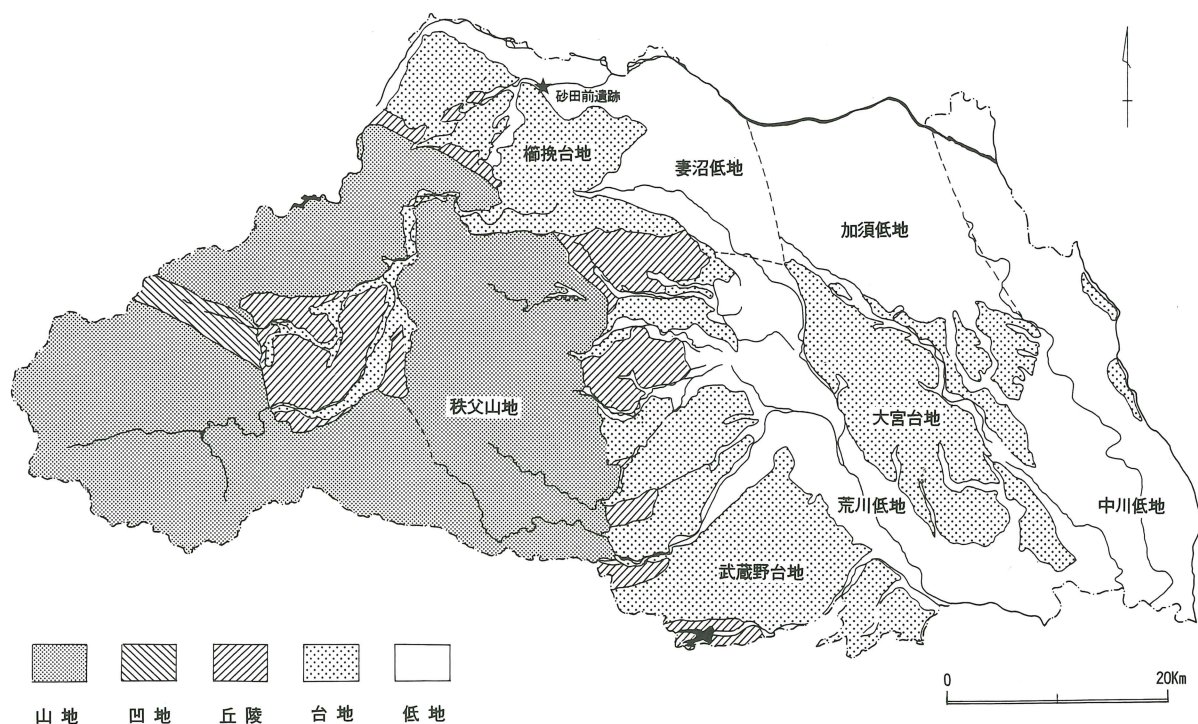
II 遺跡の立地と環境

砂田前遺跡は埼玉県大里郡岡部町大字岡字矢島道695-2番地他に所在する。JR 高崎線岡部駅から北へ約1.5kmの地点にあたり、現在では遺跡の中央に一般国道17号深谷バイパスが通っている。

本遺跡の所在する岡部町近辺の地形は、町の北辺を利根川が東流し、群馬県との境をなす。南からは、寄居町に端を発する榑挽台地が北東方向に向かって広がっている。榑挽台地は立川面に比定される比較的平坦な火山灰台地で、藤治川、唐沢川などにより浅く侵食されている。

榑挽台地と利根川の間には利根川の沖積作用によって形成された妻沼低地が広がる。この妻沼低地には利根川により多量の土砂が供給され、自然堤防が発達している。これらの自然堤防と榑挽台地との間には、後背湿地が開け、県北部でも有数の穀倉地帯となっている。さらにこの低地内には榑挽台地末端の湧水が集まる福川が東流する。また榑挽台地の西側には小山川、志戸川が北東方向に流れ、その流域には身馴川低地が形成されている。

第1図 埼玉県の地形



砂田前遺跡は榑挽台地北方縁辺を流れる福川と小山川とに挟まれた妻沼低地の自然堤防上に位置する。

台地崖線からはおよそ200m北方に当たり、比高差はおよそ10mである。

本遺跡周辺の歴史の黎明は、現在のところ北坂遺跡から始まる。遺跡は榑挽台地最奥部に位置する。旧石器時代のナイフ形石器などが出土した。

縄文時代草創期の遺跡としては西谷遺跡が著名である。爪形文土器、押圧縄文土器、撚糸文土器、有舌尖頭器などが出土している。また東光寺裏遺跡からは微隆起線文土器等が検出されている。前期の遺跡としては西浦北、四十坂遺跡で関山期の住居跡、茶臼山、東光寺裏遺跡で諸磯期の住居跡が発見されている。中期の遺跡としては榑挽台地西北縁辺に所在する水窪遺跡がまず挙げられよう。勝坂式期1軒、加曾利E式期の住居跡が26軒検出されている。また菅原遺跡からは加曾利E式期を主体とする15軒の住居跡が検出されている。後・晩期の遺跡は従来少なかったが、近年発見される遺構・遺物が増加しつつある。榑挽台地縁辺部に

所在する原ヶ谷戸遺跡からは該期の集落跡が検出され、多数の土器、土製品が出土した。また深谷市域となるが明戸東遺跡からは9軒の堀之内期の住居跡が検出された。現在の地形区分によると低地部に該当するが、これらの遺跡の所在する箇所の微視的な旧地形の復元も必要であろう。

弥生時代前期から中期中葉の遺跡分布は低地帯に散在しているが、全県的に観ると当該期の遺跡の最も発見されている地域と言える。深谷市上敷免遺跡からは遠賀川式系の土器が県内で初めて発見された。四十坂遺跡からは縄文晩期の大洞A'期からの系統とされる変形工字文を施文した土器等が出土している。弥生中期初頭に位置付けられており、学史的に著名である。中期後半段階になると深谷市清水上、宮ヶ谷戸遺跡等から櫛描文系土器が出土しているが、当該期の遺跡は発見例が少ない。深谷市明戸東遺跡からは、弥生時代後期後半の吉ヶ谷式土器を主体とする住居跡が16軒検出された。当該期の遺構・遺物が稀薄であった当地域の歴史を解明する上で非常に重要な発見である。

古墳時代前期の集落跡としては低地に立地するものとして岡部町大寄B、水窪、原ヶ谷戸、深谷市矢島南、戸森松原、上敷免、明戸東、清水上、根絡、横間栗遺跡等が挙げられ、遺跡数に若干の増加がある。該期の墳墓としては石薪B遺跡の前方後方形周溝墓、上敷免、東川端遺跡の方形周溝墓等がある。

中期後半から集落は爆発的に増加し、後期に最高潮を迎える。妻沼低地の自然堤防上に立地する大規模集落跡としては西から砂田前、上敷免、本郷前東、新屋敷東、砂田、柳町、城北、前遺跡等が挙げられる。これらの遺跡の特徴は住居跡の分布密度と重複にある。砂田前遺跡周辺で200軒、深谷市上敷免、新屋敷東遺跡周辺で270軒、深谷市城北、居立遺跡周辺で350軒以上が確認されており、5世紀後半から7世紀後半にかけて、およそ10キロ四方に優に1000軒を越える住居跡が築かれたことになる。

次に周辺の主要古墳について概観する。5世紀代に比定されているのは美里町長坂聖天塚古墳、河輪聖天

塚古墳、諏訪山古墳（1、2号墳）等、諏訪山丘陵上に立地しているものが多い。

集落の増加と歩を同じく後期になると古墳は激増する。藤治川流域には西山・千光寺古墳群、櫛挽台地上には四十坂、白山、上原古墳群等が所在する。またお手長山古墳は全長およそ60mの規模を有する。築造年代は6世紀末葉と考えられ周辺地域における最後の前方後円墳である。愛宕神社古墳は1辺約37mの方墳で、当地域の古墳の終末期を示しており重要である。

古墳時代終末から律令期に至って、中心的な遺跡は台地上に移行する。特に小山川中流域の榛澤・後榛澤地区および櫛挽台地端となる岡地区に集中する。岡部町を含む現在の太田郡域の古代行政区については「倭名類聚抄」等の文献から榛澤、幡羅、大里、男衾の4郡とされている。本遺跡のおよそ100m西側には岡部町中宿遺跡が所在する。榛澤郡衙正倉跡に比定されている。また台地上に立地する熊野遺跡の数十次に上る調査では、7世紀後半～8世紀を中心とする大規模な建物群や大溝等が検出されている。注目される遺物としては刻字紡錘車、奈良三彩などが挙げられる。また帯金具、円面硯も多量に出土しており、中宿遺跡に隣接する滝下遺跡とともに今後の遺跡の性格を含めた研究成果が期待される。

また福川中流域においては深谷市西別府庵寺、式内社の楡山神社などの所在や新屋敷東遺跡の総柱掘立柱建物跡などから官衙関連遺跡の存在が予想される。

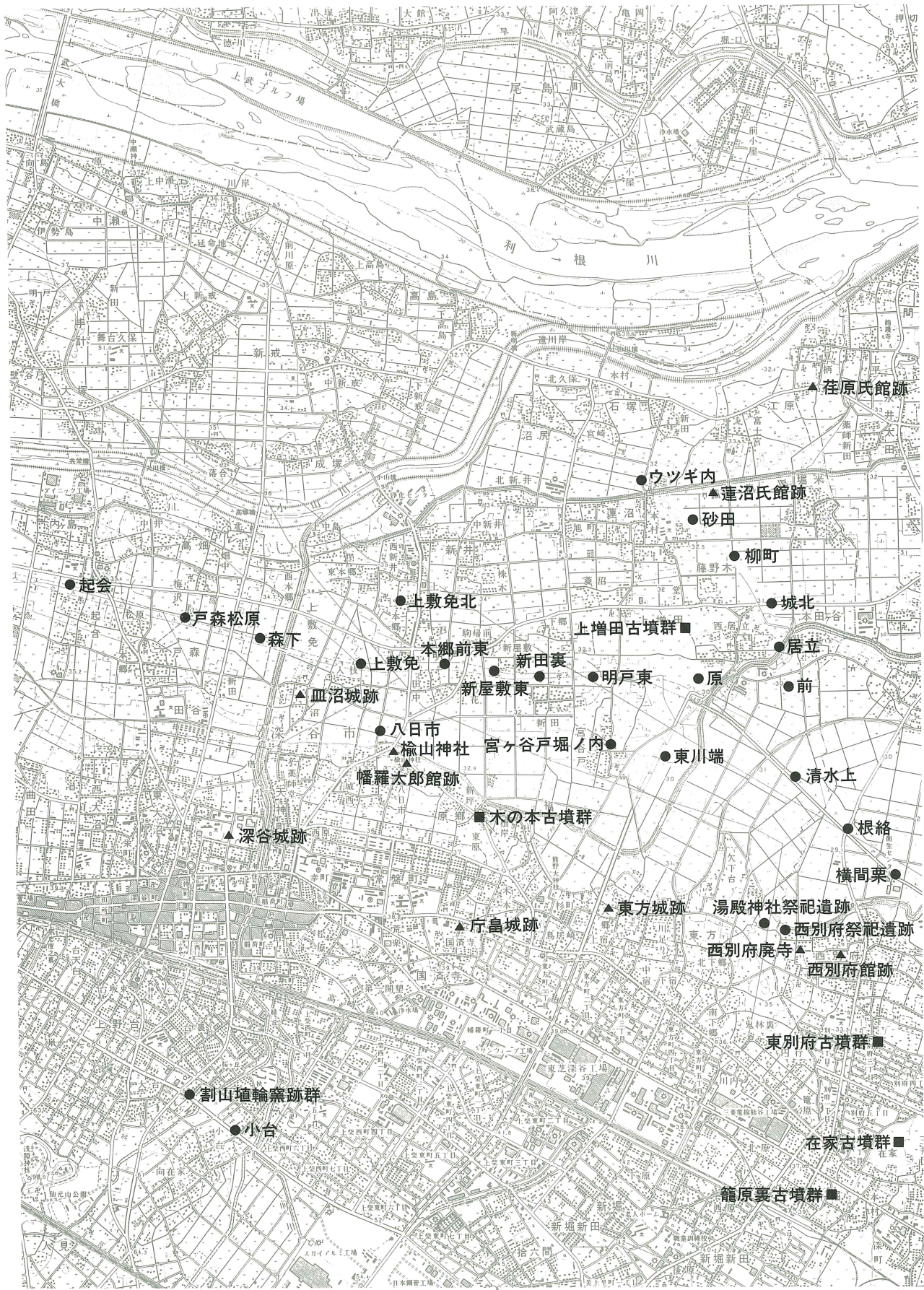
本遺跡周辺には岡部条里遺跡が所在している。本遺跡においては遺憾ながら古代の水田面は検出できなかったが、岡部町教委が発掘調査した岡部条里遺跡からは条里型地割に伴うとされる溝および堰が検出されている。また平成7年度に埴埋文事業団が行った調査では条里型地割に対応する古代館跡が検出されており注目される。

中世前半において本地域は武蔵武士団の本拠地であり、滝瀬氏館跡、蓮沼氏館跡、西別府館跡、幡羅太郎館跡などの在地武士の館跡が築かれていた。

（引用・参考文献はV章に掲載）

第2図 周辺遺跡分布図





- 荏原氏館跡
- ウツギ内
- ▲ 蓮沼氏館跡
- 砂田
- 柳町
- 城北
- 居立
- 前
- 東川端
- 清水上
- 根絡
- 横間栗
- 湯殿神社祭祀遺跡
- 西別府祭祀遺跡
- ▲ 西別府廃寺
- ▲ 西別府館跡
- 東別府古墳群
- 在家古墳群
- 籠原裏古墳群
- ▲ 深谷城跡
- ▲ 皿沼城跡
- ▲ 八日市
- ▲ 榎山神社
- ▲ 幡羅太郎館跡
- 木の本古墳群
- ▲ 斤島城跡
- ▲ 東方城跡
- 割山埴輪窯跡群
- 小台
- 起会
- 戸森松原
- 森下
- 上敷免北
- 本郷前東
- 新田裏
- 新屋敷東
- 明戸東
- 原
- 新田
- 新屋敷
- 宮ヶ谷戸堀ノ内

III 遺跡の概要

砂田前遺跡は、妻沼低地の自然堤防上に立地している。遺構の確認面標高は約37.8mである。およそ150m南の櫛挽台地との比高差はおよそ10mである。

調査前には水田として利用されており、確認面からおよそ0.5mは現水田の客土であった。

本遺跡の基本層序については付篇に詳しいが、分析結果としてはいわゆる埋没ロームではなく、水性堆積の可能性が高いことが判明した。また浅間C軽石～浅間A軽石の各時期の火山灰も確認されたが、遺存状況は不良で、遺構の調査段階では検出できなかった。

地震による液状化現象に起因する噴砂も調査区西側から数カ所検出されたが、遺構の形態を壊すには至っていない。なお確認された噴砂はいずれも遺構の埋没後のものであった。

本遺跡周辺は第3図の通り、各種の開発に伴う発掘調査が数多く実施されており、砂田前遺跡も本調査区を含め計3箇所の調査がなされている。

昭和62、63年度に一般国道17号深谷バイパス建設に先立ち、事業団が調査、報告した砂田前遺跡では、住居跡102軒（古墳時代後期74軒、平安時代24軒、不明4軒）、掘立柱建物跡1棟、土壙12基、溝3条などが検出され、低地部の大集落として注目された。

本調査と時期を同じく平成6年度に岡部町教育委員会により発掘された調査区からは古墳時代後期の住居跡9軒、溝跡などが検出されている。また畝状遺構が調査区西半から検出されている。

本遺跡の南、東側には岡部条里遺跡が所在する。平成4～5年度に岡部町教育委員会により調査が行われ旧河道および分流する大溝が検出され、その間からは堰も発見され注目される。溝は条里型地割に伴うと想定されている。また検出された住居跡からは多数の土製勾玉、碧玉製管玉、滑石製白玉等が出土している。

砂田前遺跡の西方には滝下遺跡が所在する。上記した岡部条里遺跡のものと同じと想定される旧河川が平成7年度の滝下遺跡の調査でも検出され、遺存状況の

極めて良好な鉄製品、木製品、内面に漆の付着した須恵器の甕等が出土した。また鍛冶関連の遺構も検出されている。

次に本調査区から検出された遺構の概要について述べたい。縄文時代後期の住居跡は1軒検出された。また該期の遺物集中区も検出された。縄文中期、晩期の遺物も少量出土したが、主体は縄文時代後期の堀之内期に帰属すると思われる。

遺構は検出されなかったが、古墳時代前期の遺物集中区も検出され、S字状口縁台付甕等が出土した。

古墳時代後期に帰属するものとして住居跡87軒、掘立柱建物跡6棟、土壙15基、溝28条が検出された。

住居跡は調査区西側に密集する傾向にあり、住居跡間の重複が顕著であった。調査区南東側は土取りによる削平をうけており、遺構は住居跡4軒等が検出されたに過ぎない。浅い遺構は削平された可能性が高い。

住居跡の遺存状況は概ね良好でカマドの煙道部天井が遺存していた遺構も多かった。覆土下層から床面直上にかけて多量の炭化材が検出された住居跡は計6軒を数え、なかでも30、43号住の床面全域からは良好な炭化材が検出された。

掘立柱建物跡は計6棟検出された。出土遺物が僅少であったため帰属時期は確定できないが、覆土の様相等から古墳時代後期のものと推定した。

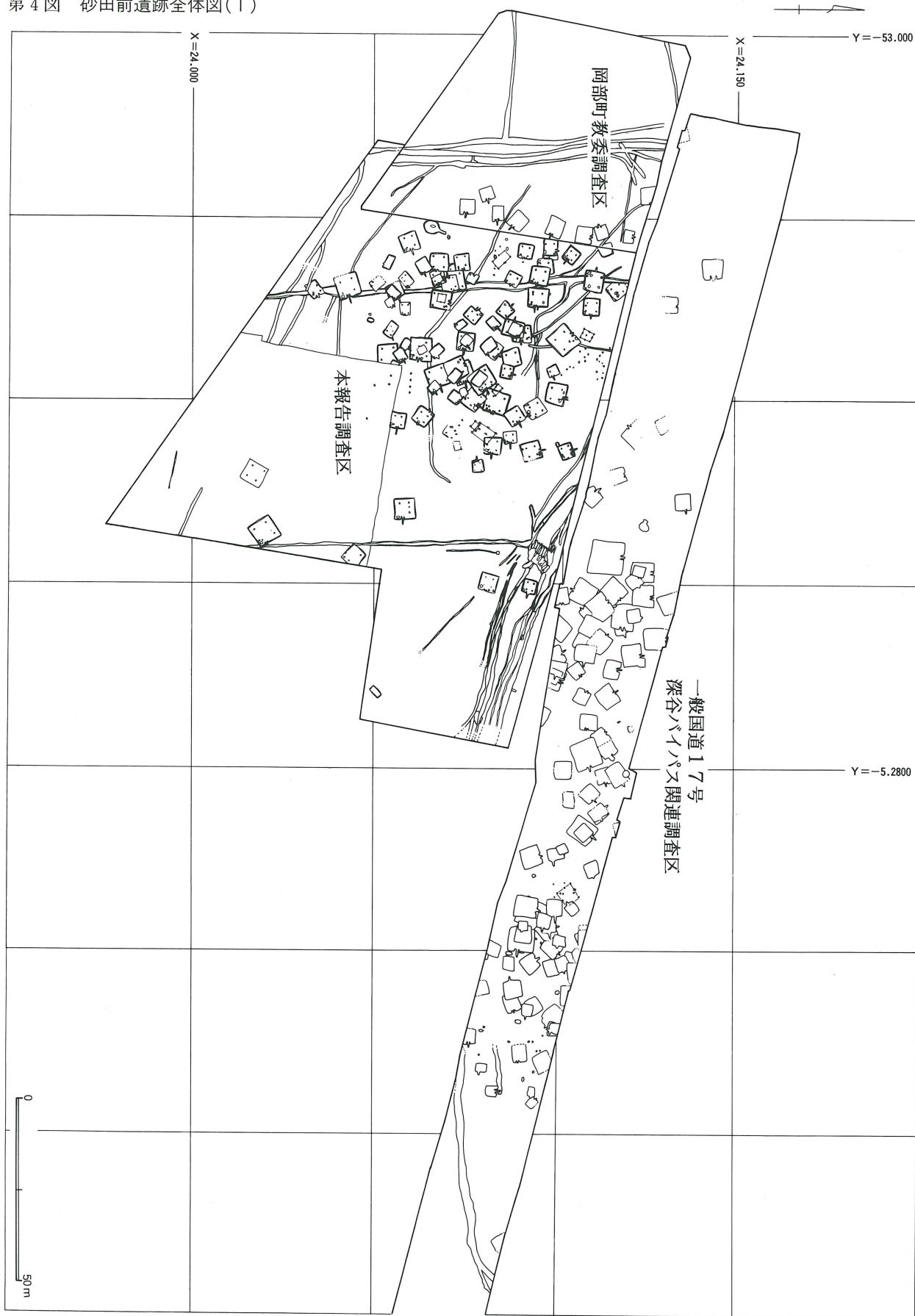
溝は、ほぼ南北方向と北西方向を向くものが主体を占める。近隣の遺跡から検出された溝との関係から条里型地割との関連の可能性もあるが、良好な出土遺物は僅少で、確実な帰属時期は不詳である。

古墳時代後期の住居跡から出土した土器は土師器が主体を占め、本報告で図化したものは約1,200個体に上る。須恵器は極少数が出土したに過ぎず本遺跡の特徴の一端を表しているものと考えられる。その他の出土遺物としては計300個体以上の編物石、100個体の土錘が出土している。第42号住居跡出土の坏内部から白玉100個体が検出されたことは特筆されよう。

第3図 周辺遺跡・調査区位置図



第4図 砂田前遺跡全体図(1)



第5図 砂田前遺跡全体図(2)(1/800)



IV 発見された遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡からは縄文時代の住居跡1軒と遺物集中区が1箇所検出された。また主に調査区西半に位置する古墳時代後期の住居跡覆土からも散逸して出土した。

出土した縄文土器は中期、後期中葉のものが極少数認められるが、その大半は後期前葉に比定される。また縄文時代に帰属する石器としては黒曜石製石鏃、打製石斧等が出土した。

第87号住居跡（第7・8図）

第87号住居跡はH-4グリッドに位置する。確認面標高は37.5mであり、古墳時代後期の遺構確認面よりおよそ0.4m低かった。

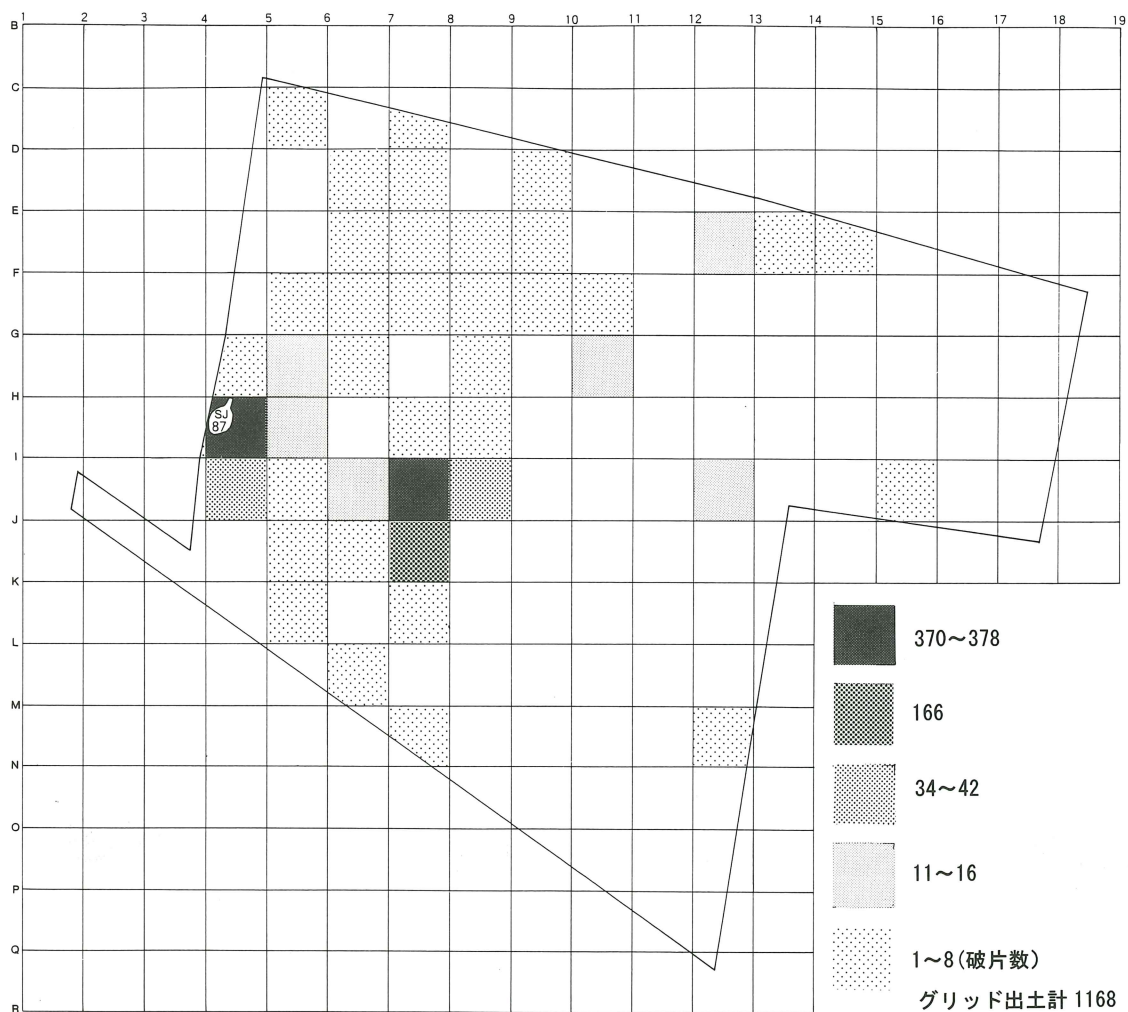
主軸方位はN-154°-Wを指す。住居跡の平面形

態は北側に張り出しを持つ柄鏡型を呈し、長径4.89m、短径4.35m、深さ0.06mを測る。

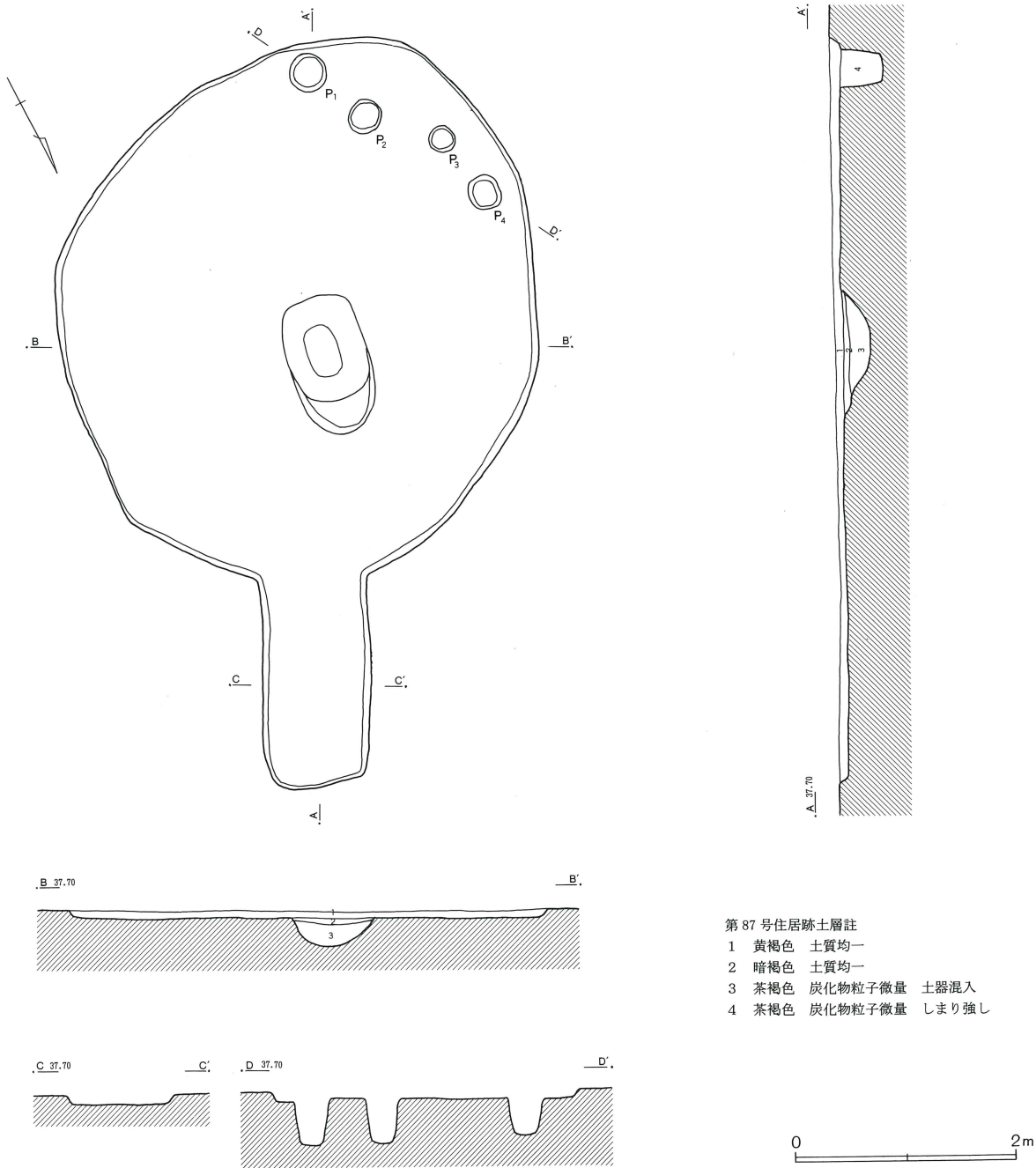
ピットは4基検出され、床面からの深さはP1=0.39m、P2=0.42m、P3=0.36m、P4=0.33mであった。住居跡ほぼ中央から平面形態楕円形の掘り込みが検出された。長径1.26m、短径0.72m、深さ0.27mを測る。焼土、被熱痕等は検出されなかったが、覆土中から炭化物粒子が微量検出された。その位置から炉跡と想定される。

張り出し部は長方形を呈していたが、床面と同レベルであった。ピット等は検出されなかった。長軸長1.89m、短軸長0.99mを測る。覆土中から比較的多く遺物が出土したが、残存率は概して低かった。

第6図 縄文時代遺物分布概略図



第7図 第87号住居跡



- 第87号住居跡土層註
- 1 黄褐色 土質均一
 - 2 暗褐色 土質均一
 - 3 茶褐色 炭化物粒子微量 土器混入
 - 4 茶褐色 炭化物粒子微量 しまり強し

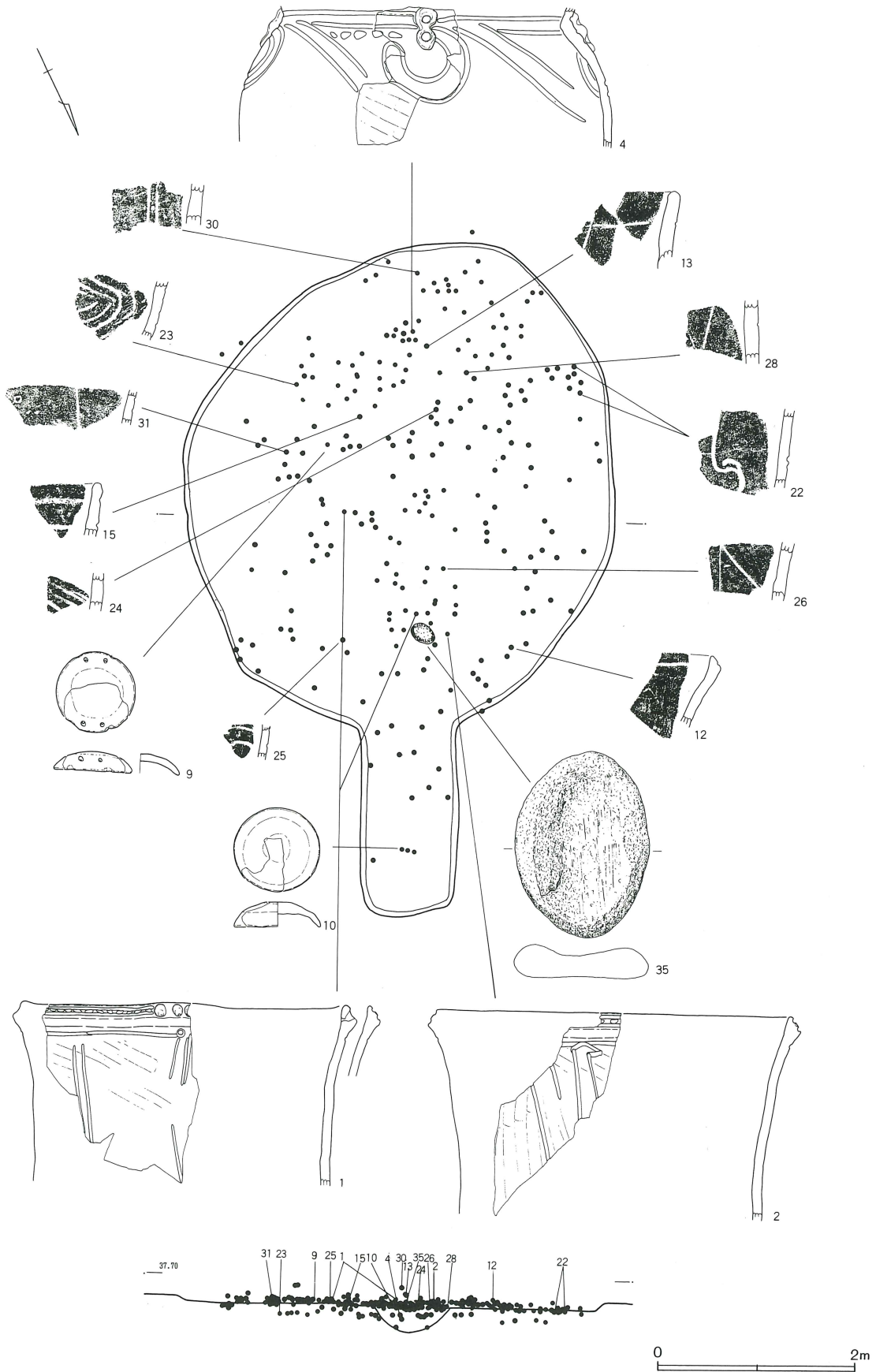
出土遺物 (第9・10図)

1は深鉢口縁から胴上半部にかけての破片である。肥厚しつつ「く」の字に内湾する口縁で、二条の沈線と点列が巡らされる。正面とみられる部分には3ないし4個一単位の盲孔が配されるが、この内の一つが補修孔として利用されたため、貫通孔となっている。胴部との境には一条の沈線が巡らされるが、全周はしない。胴部には平行沈線による文様が描かれるものと思

われる。復元最大径35.8cm、現存高18.4cmを測る。胎土に多量の砂・シルトを混入する。器面はくすんだ黄褐色で、風化が著しい。

2は深鉢口縁から胴上半部にかけての破片である。肥厚しつつ「く」の字に内湾する口縁で、二条の沈線と点列が巡らされる。胴部との境には一条の沈線が巡らされる。胴部には平行沈線による文様が描かれるが、閉塞する平行沈線の上端がかぎ状に張り出すなど、称

第 8 图 第87号住居跡遺跡分布图



名寺式的な手法を残す土器である。復元最大径38.2cm、現存高20.7cmを測る。1とは径がやや異なるものの、プロポーシオンや口縁の造りなどに共通点が多く、同一個体である可能性が高い。胎土には多量の砂・シルトの他、径1mm以上の小礫の混入が目立つ。器面は暗灰黄褐色で、風化が著しい。

3は深鉢口縁から胴上半部にかけての破片である。胴部から頸部にかけて直線的に開き、口縁部は肥厚し、稜をなして軽微に内湾する。稜をはさんで上下にそれぞれ1条の沈線を巡らせる。また、胴部との境にも1条の沈線が巡らされる。胴部には2に類似する沈線文様が描かれるものと思われる。復元最大径31.6cm、現存高11.2cmを測る。胎土に多量の砂とチャート小礫を混入する。器面は灰黄褐色で、風化顕著。

4は深鉢胴部の破片である。胴中段に緩やかにくびれを持ち、胴下半にかけて若干張り出すものと思われる。他の個体に比べごく細い沈線により平行沈線文が描かれ、また器面全体に淡い削りの痕を残している。復元最大径20.6cm、現存高13.7cmを測る。胎土に多量の砂と小礫を混入する。器面は橙色を帯びた灰黄褐色で、風化が著しい。

5は深鉢の胴部破片である。胴部は球胴状に張り出し、頸部はやや直線的に外反するものと思われる。頸部と胴部の境に強くくびれを持ち、この部分に2条の沈線による区画が施され、これに沿って列点文が施文される。区画の中途に8の字状の貼り付けが配され、これを起点にしてJ字のモチーフが描かれる。このJ字文は4単位配置されるものと思われる。それぞれの単位は斜方向の平行沈線によって相互に連結され、初源的な入り組み文を構成するものと思われる。復元最大径38.4cm、現存高14.3cmを測る。胎土に多量の砂と、石英・結晶片岩などの小礫を混入する。器面は橙色を帯びた灰黄褐色である。焼成は悪くないが、風化による器面の荒れが甚だしい。

6は深鉢口縁部の破片である。大波状口縁の波頂部で、口唇は強く肥厚し、中央に貫通孔を持つ。口端上に一条の沈線が巡らされ、短沈線・盲孔・貫通孔など

の組み合わせによって文様が描かれる。

7は深鉢口縁部の突起である。水平口縁上に付される半円形の突起で、中央に貫通孔を持つ。表裏及び口端上に短沈線と盲孔によって文様が描かれる。口唇は強く肥厚し、「く」の字に内屈する。屈曲部直下に段が形成され、胴部には沈線文がみられる。

8は注口部の破片である。広口の鉢に近い器形の肩部に付されるものと思われ、橋梁状の把手に接続している。左右に弧状の短沈線と盲孔を組み合わせた文様が描かれる。注口部分の長さは2~2.5cm、口径3cm。土器本体に比して寸詰まりの注口である。

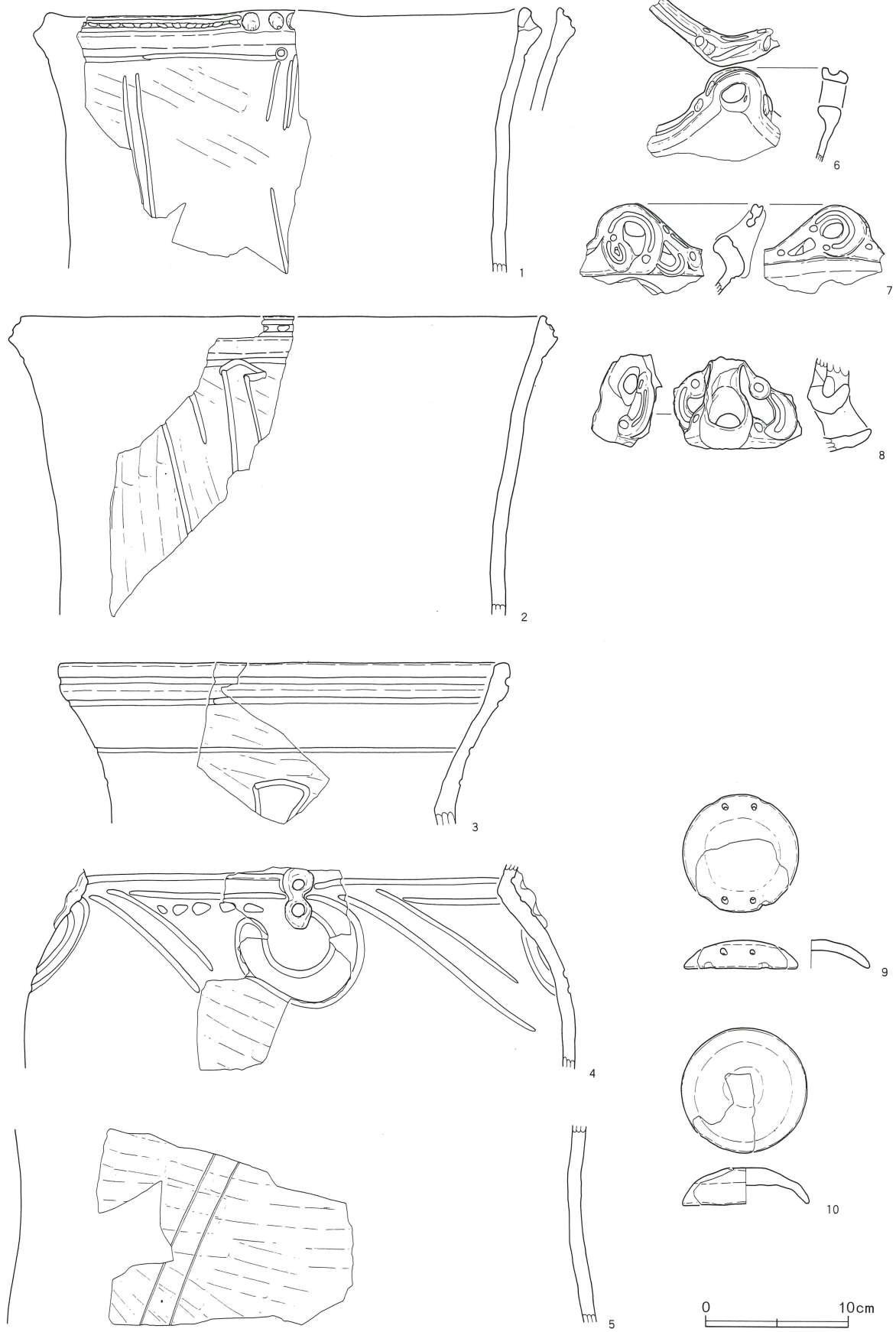
9、10はいずれも土製蓋である。9は復元径8.2cm、器高2cmを測る。縁辺部に沿って2個1単位の貫通孔がみられ、紐通しの機能が想定される。また、中心線からみて貫通孔よりやや外側で、蓋のへりが幅1cmにわたって摩滅・剝離した部分が観察され、紐状のものが蓋内面から外面に向けて通され、前述の摩滅部分を通して容器本体の、貫通孔の間隔よりやや幅広の把手などに結束されたものと思われる。胎土に多量の砂と結晶片岩の小礫を混入する。器面は黒褐色で、風化が著しい。10は復元径8.8cm、器高2.6cmを測る。9同様貫通孔を持っていた可能性がある。若干の砂・シルトを混入するが、黒雲母の粒子が特徴的にみられる。器壁は灰黄褐色で、風化・摩滅が著しい。

11、12は緩やかに内湾する深鉢口縁部である。盲孔が配され1条の沈線が巡る。

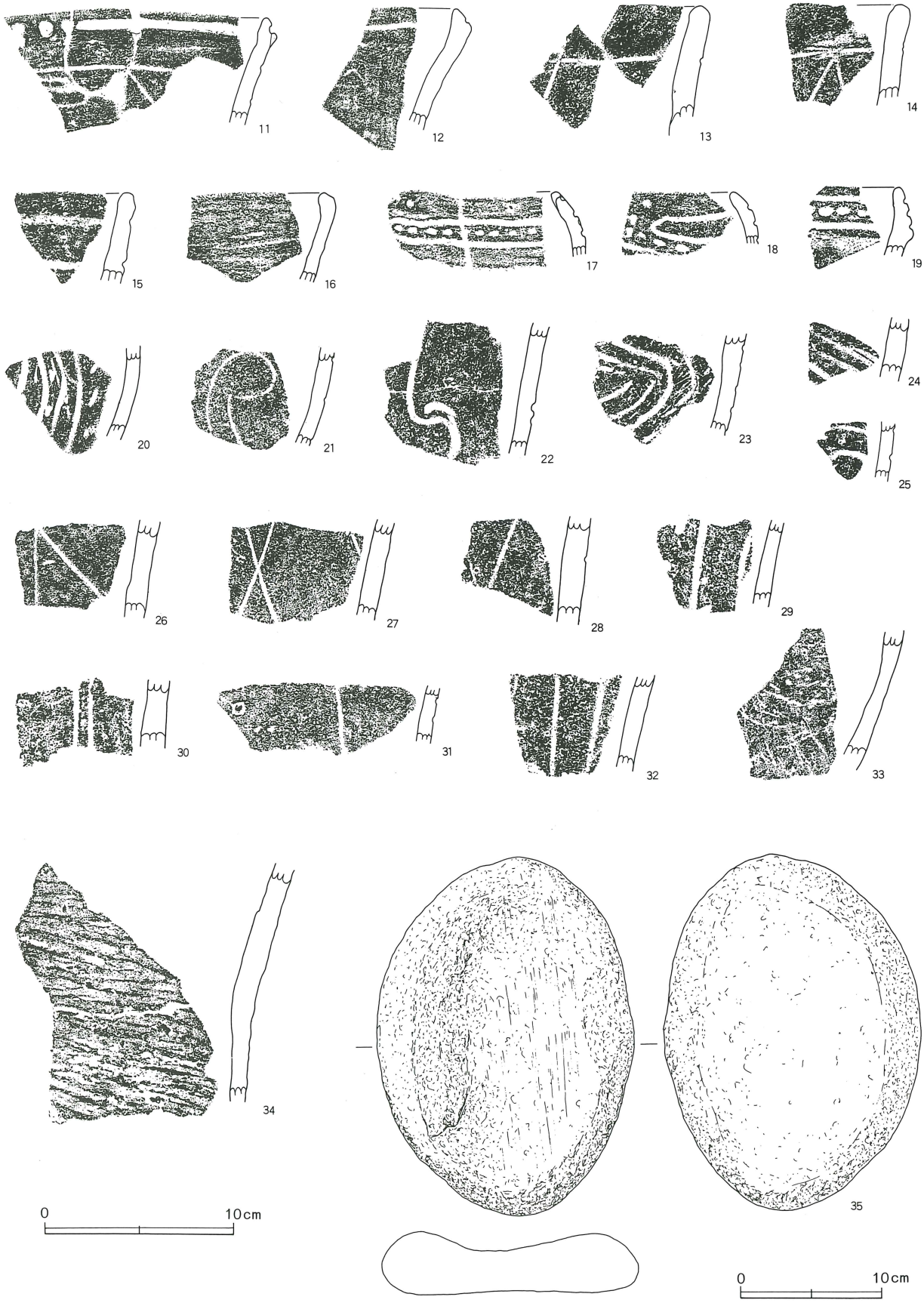
13~15は沈線により幅狭の口縁部無文帯を区画する。13、14は胴部に条線により格子目文を施文する。

17は内湾した口縁部を有し、緩やかな波状を呈する。波頂部には盲孔が配される。幅狭の沈線文による区画内に刺突文列が施文される。18は17と同一個体と思われるが、沈線文間に刺突列が配される。20は沈線文区画内に単列の刺突文列が配される。21~25は1~2本沈線文にてモチーフが描かれる。26~28は沈線による格子目文を有する胴部破片である。30~32は幅狭の2本沈線による懸垂文と思われる。33、34は深鉢の胴部下半である。

第9図 第87号住居跡出土遺物(1)



第10図 第87号住居跡出土遺物(2)



35は安山岩製の石皿である。表面は大きく窪む。側面、裏面は自然面である。表面に縦位の擦痕が認められる。縦25.3cm、幅18.2cm、厚さ4.5cm、重さ2.8kgである。

Ⅰ・J-7グリッド遺物集中区（第11図）

古墳時代後期の第86号住の調査中に、南壁面から縄文土器が数点検出されたため、確認面を数回に分けて掘り下げていった。精査に努めたが、壁面、炉跡、柱穴等は検出されなかった。したがってⅠ・J-7グリッド遺物集中区として報告する。

出土遺物（第12・13図）

1は深鉢口縁から胴上半部にかけての破片である。軽微に肥厚しつつ「く」の字に内湾する口縁で、一条の沈線が巡らされる。四単位の小波状口縁となるものと思われ、波頂部には盲孔と短沈線による小文様が配される。胴部には対をなす逆U字状の沈線が垂下する。復元最大径43.4cm、現存高13.6cmを測る。胎土に多量の砂を混入する。器面は灰黄褐色で、風化が顕著である。

2は深鉢口縁部である。若干肥厚しつつ「く」の字に内湾する口縁で、口端直下に一条の沈線が巡らされる。胴部との境にも沈線が巡らされるものと思われる。復元最大径31cm、現存高4.5cmを測る。胎土は砂質で石英・凝灰岩などの小礫を混入する。器面は灰黄褐色で、風化が著しい。

3は深鉢の口縁から胴部中段にかけての大破片である。4単位の小波状口縁をなすものと思われる。比較的薄手の器壁で、全体に良く削り込まれている。また、胴下半部から底部にかけて縦位の磨きが施されるものと思われる。復元最大径29.4cm、現存高21.6cmを測る。器面は暗灰黄褐色で黒斑がみられる。

4は深鉢の胴部破片である。胴中段に緩やかなくびれを持ち、胴下半にかけて若干張り出すものと思われる。全面に削りの痕を残す。復元最大径35.6cm、現存高17.3cmを測る。胎土に多量の砂と小礫を含む。器面は暗灰黄褐色で黒斑がみられる。風化が著しい。

5～7は胴部に縄文施文される。5は内折する口縁

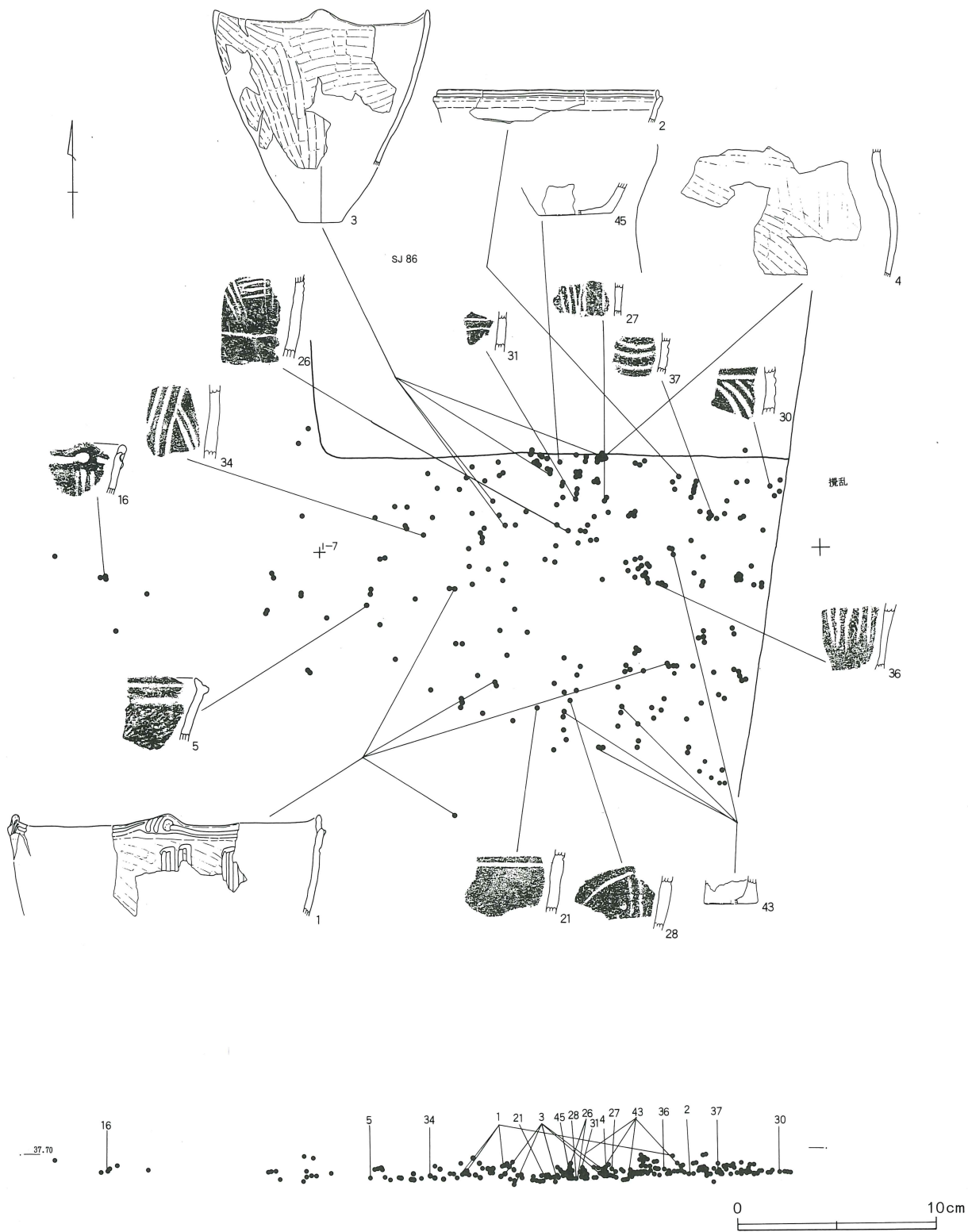
部を有し、直線的な沈線文が施される。頸部は浅い沈線文で区画しその直下から縄文施文される。6は地文縄文上に懸垂文を施す。8～14は胴部に条線文を施文する。8は小波状を呈し、波頂部に盲孔を配する。15は内折する口縁部が開く器形で、小波状部の盲孔の右側にC字状沈線文を、左側に口縁部と連結する沈線文を施文する。16～18は数本の沈線文が口縁部直下より垂下する。24～40は沈線文は各種モチーフが施される。40は沈線文により重渦文状の渦巻文が施文される。41には数帯の隆帯が貼付けられる。

グリッド出土土器（第14・15図）

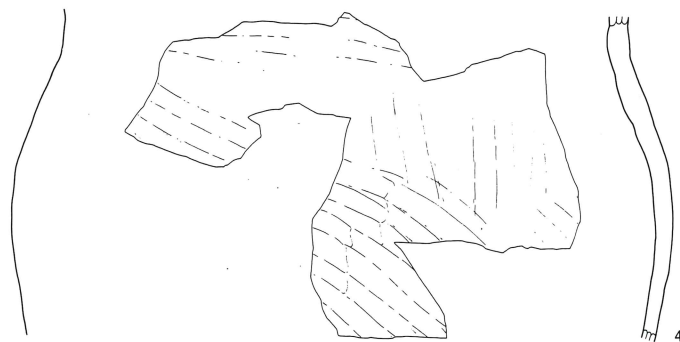
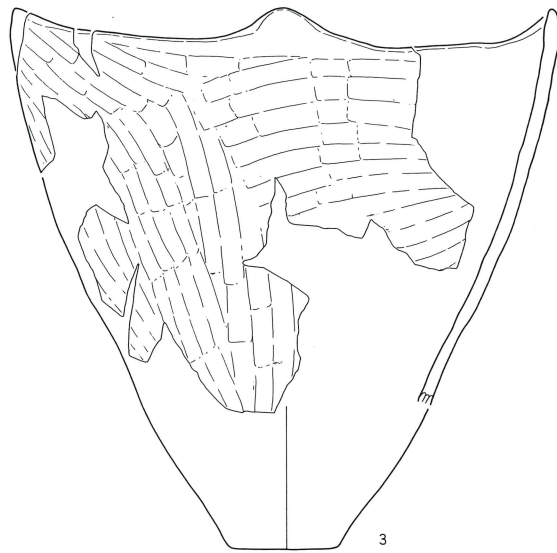
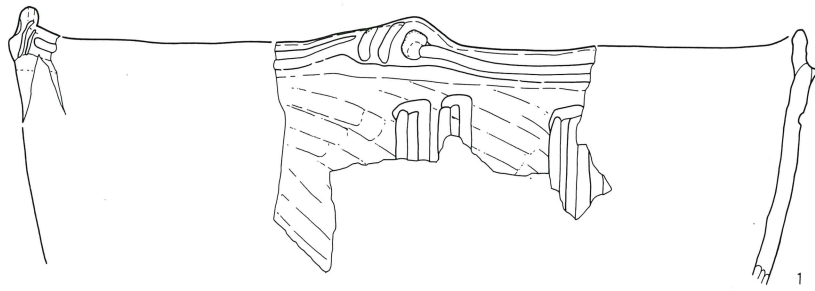
1は注口土器口縁部から頸部にかけての破片であると思われる。口唇部は「く」の字に内屈し、外反する頸部との間に「受け」を形成する。頸部下端に強い屈曲を持ち、ここから球胴に近い胴部へと続くものと思われる。口縁上に粘土紐にひねりを加えた突起が恐らくは2単位配され、うち1基が注口部に接続するものと思われる。突起頂部の内面及び外面にはそれぞれ1基の盲孔が付される。口縁外面には1条の沈線が巡らされる。この沈線は突起部分で途切れ、末端に盲孔が付される。復元最大径12cm（突起部分を除く）、現存高5.7cmを測る。胎土に若干の砂粒・シルトを混入する。器面は橙色を帯びた灰黄褐色で、風化が著しい。

2は小型深鉢の口縁から胴部にかけての破片である。3単位の緩やかな波状口縁で、波頂部にはひねりを加えた円盤状の突起が配される。口唇断面は「く」の字に内屈し、内面に1条の隆帯が巡らされる。隆帯に沿って円形の刺突が並ぶが、このうち波頂部直下の一つは貫通孔となっている。外面胴部上段に4条の平行沈線がほぼ水平に巡らされ、この部分にLR横位回転の縄文が充填される。波頂部下では平行沈線間が縦位の短沈線によって区切られる。内面には3条の沈線が口縁に沿って波状に巡らされる。沈線間には斜めの細沈線が充填される。復元最大径（突起部分を除く）14.2cm、現存高8.7cmを測る。胎土に多量の砂を混入するが、黒雲母粒子が特徴的にみられる。器面は暗灰褐色で、風化が著しい。

第11図 I・Jグリッド遺物集中区



第12図 I・Jグリッド出土遺物(1)



0 10m

第13図 1・Jグリッド出土遺物(2)



3は深鉢口縁部である。4単位の大波状口縁となるものと思われる。口唇はやや肥厚し、「く」の字に屈曲する。波頂部には盲孔を伴う貼り付けが付され、これを起点に刻みをもつ隆帯が垂下する。口唇上には2条の沈線が巡らされる。胎土に若干の砂粒が混入される。器壁は暗灰褐色で、風化が著しい。

4は注口土器の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部から頸部にかけて一對の橋梁状の把手を持ち、このうち一つが胴上半部の注口と連結するものと思われる。把手背面には粘土紐にひねりを加えた装飾が施される。把手頂部には盲孔を有する。口縁部に段を持ち、口端内面に「受け」が形成される。「受け」部分の内径は8.8cmほどで、これは第87号住居跡出土の土製蓋の外径とほぼ一致する。このため本資料も土製蓋と組み合わせて使用された可能性が高い。頸部と胴部の境は断面三角形の微隆起線によって区画され、胴部にも同様の微隆起線によって文様が描かれる。復元最大径13.8cm（注口・把手部分を除く）、現存高7.5cmを測る。胎土に多量の砂と、チャートを主体とする小礫を混入する。器面は橙色を帯びた灰黄褐色で、風化が著しい。

5は深鉢口縁部であると思われる。口唇部は「く」の字に内屈し、外反する頸部との間に「受け」を形成する。口縁外面には「ノ」の字状の貼付文が付され、また1条の沈線が巡らされる。復元最大径27cm（貼付部分を除く）、現存高6.2cmを測る。胎土に多量の砂が混入される。器面は灰黄褐色で、風化が著しい。第8号住居跡覆土出土である。

6は台付土器の脚台部であると思われる。外面に細沈線によって台形の区画が描かれ、全面に淡い削りの痕が残される。内面には輪積み痕が残される。裾広がりの器形で軽微に外反する。胎土に多量の砂を混入するが、石英の粒子が特徴的にみられる。器壁は黄味がかった灰白色で、風化が著しい。

7は土偶片と思われるものである。偏平な棒状で、わずかながら「く」の字に屈曲しており、肩から二の腕にかけての部分であると思われる。上面に横位の短

沈線が重畳して施文される。全面に手づくねの凹凸が残される。胎土にシルトと微量の砂粒・小礫が混入される。器壁はやや赤みを帯びた灰黄褐色で、やや風化している。

8～10は打製石斧である。いずれも形態は分銅形である。8、9は古墳時代後期の第18号住居跡覆土に混入していた。8は片面に自然面を残す。両側縁の挟りが弱い。長さ8.9cm、幅6.5cm、厚さ2.0cm。頁岩製。

9は最大幅を刃部に有するが、非対称形となる。長さ9.6cm、幅6.6cm、厚さ1.7cm、頁岩製。10は長さ8.3cm、幅6.3cm、厚さ1.9cmとやや小形である。頁岩製である。

11は黒耀石製の剥片である。裏面に主要剥離面を残す。基部側に再調整が認められる。

12は石鏃である。基部には緩やかな挟りが入り、側縁はやや円みを帯びる。長さ1.6cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、黒耀石製。

13～15は中期に帰属すると思われる。15は縦位の隆帯の両側縁に刻み目が施文される。

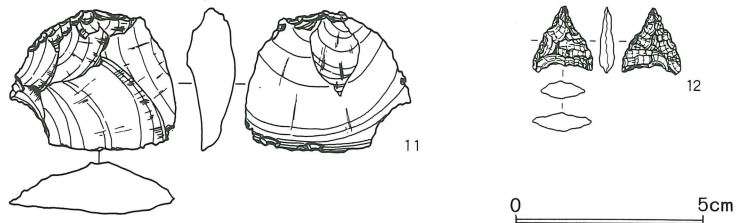
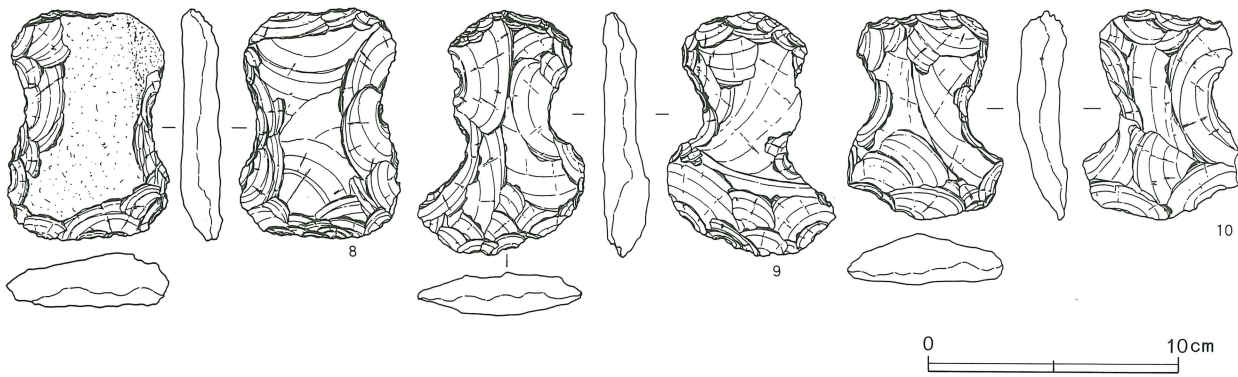
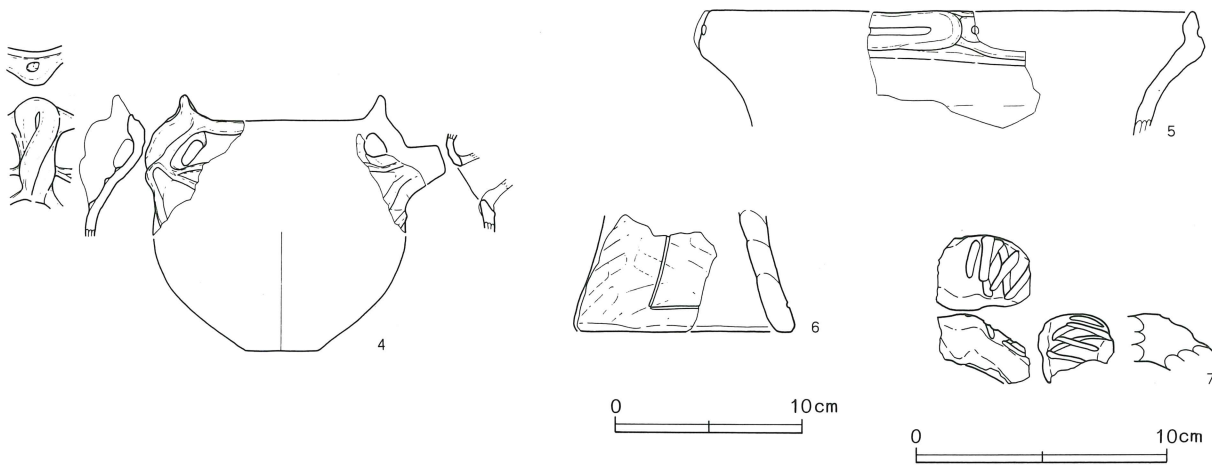
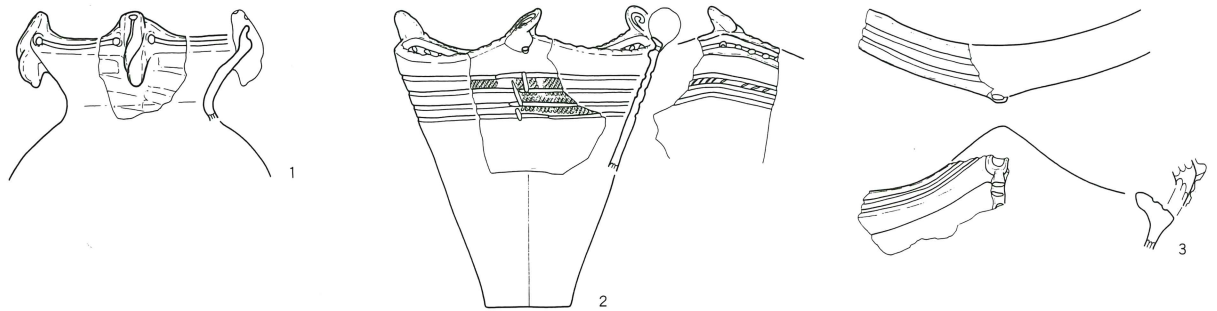
16～45は後期前葉の土器群を一括した。16～19は胴部に縄文が施文されるものであるが、18は肥厚する口縁部が僅かに内彎しながら開く器形を有する。地文縄文の上に蕨手状となると思われる懸垂文が施文される。貼付文を有する。

20～32は深鉢口縁部である。20は波状を呈し、盲孔を起点に沈線文が描かれる。21は緩やかな波状を呈し、短沈線と盲孔により文様が描かれる。また沈線間には列点文が施文される。22、23は2条の沈線と列点文が施文される。27には盲孔が配される。

33～39は沈線文により各種モチーフが描かれる。40は沈線文間に列点文が施文される。41、42は渦巻文が施文され列点が配される。

43、44は隆帯文を有しいずれも刻みが施される。46～49は後期中葉以降の土器群を一括する。46は口縁部に2本の隆帯が横位に貼付けられ、47～49には平行沈線が描かれ、48、49の内面にも細沈線が施文される。50は晩期に帰属すると思われる。

第14図 グリッド出土遺物(1)



第15図 グリッド出土遺物(2)



2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 古墳時代前期遺物集中区

本遺跡からは古墳時代前期の遺物集中区が確認された。当該期の遺物はK・L-7グリッドを中心に分布する。遺物集中は隣接して2箇所あり、いずれも直径5m程の範囲に収まっていたが、北側に位置するK-7グリッドの方が出土量は多かった。

遺構の存在を考慮して精査を重ねたが、掘り込みは検出されず、炉跡、柱穴等も検出されなかったことから遺物集中区と認定した。なお本区からは古墳時代後期の土器小片も数点出土した。

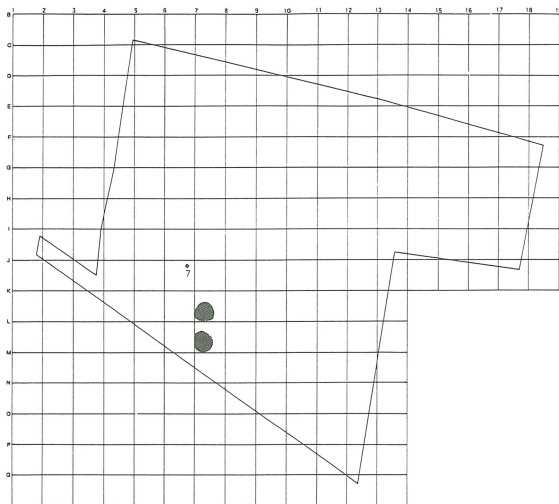
遺物出土レベルは概ね37.6mであり、周辺の古墳時代後期の住居跡確認面よりおよそ0.3m低いがJ-7グリッドの縄文土器集中区の遺物出土レベルとほぼ同じであった。

同一個体の遺物が集中して出土した箇所も認められたが、散逸しているものが多かった。また遺存状況も概して悪く、大半が復元実測である。

出土遺物 (第19図)

1~4はS字状口縁台付甕である。口径は12~14cmである。いずれも口縁部屈曲は鈍く、特に内面は緩やかに屈曲するに留まる。外面調整は肩部以下を横・斜位ハケメ調整を施した後に上位に縦位ハケメ調整を行う。ハケメ状工具はいずれも1単位が7本/1cm程の

第16図 古墳時代前期遺物分布概略図



細かいものである。いわゆる肩部横ハケは図化成し得なかった破片の中にも1点も存在しなかった。内面調整は横・斜位のヘラナデである。いずれも胴部の器壁は薄い。1の頸部外面には棒状の工具痕が数ピッチ認められる。口縁部接合段階での痕跡と思われる。

5の壺形土器は最大径を胴部下半に有すると思われる。張りのない肩部から屈曲して口縁部に至る。端部は丸く収まる。肩部内面に指頭圧痕、胴部内面に輪積み痕が明瞭に残る。外面調整は器面が荒れており不明である。器壁は全体に厚い。

6は単純口縁の壺形土器である。最大径を胴部下半に有するやや下膨れの器形で、口縁部は緩やかに立ち上がった後、大きく外傾する。端部は丸く収まる。内外面ともヘラナデ調整される。

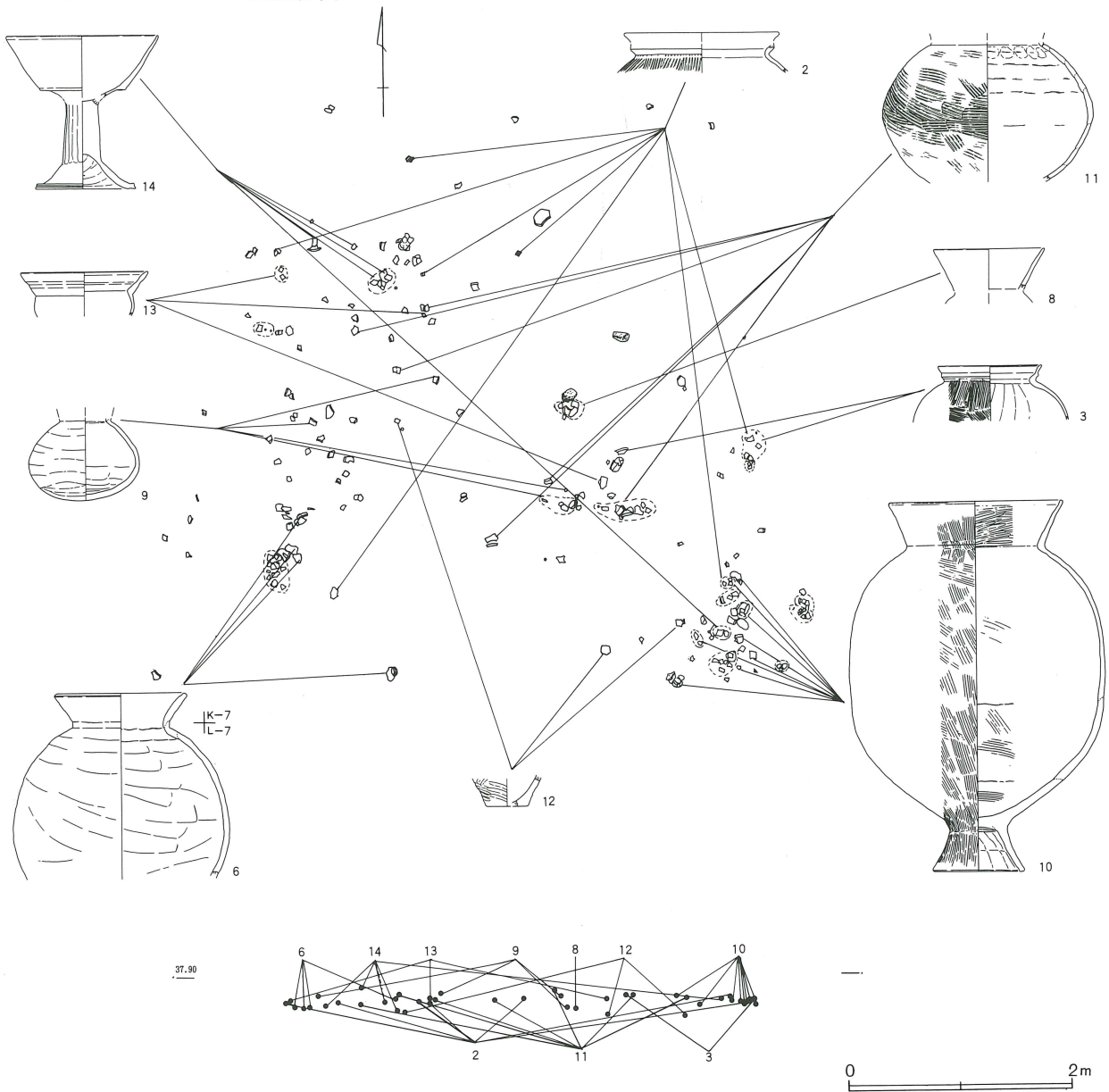
7の壺形土器は球形の胴部と大きく外傾する口縁部からなる。口縁部上位は僅かに外反する。器壁は薄い。胴部外面は横位ヘラナデを施す。内面は口縁部との接合部に指頭圧痕を明瞭に残す。胴部は斜位ヘラナデである。なお本個体の出土地点は集中区からおよそ10m北西に離れたJ-6グリッドから遺構に伴わず単独で出土したが、本集中区出土遺物と同時期と認定し、本項で掲載することとした。

9は小形の壺形土器と思われる。口縁部を欠損する。胴部最大径を下位に有する下膨れで、明瞭な底部は形成されない。内外面ともヘラナデ調整される。焼成は良好で赤褐色を呈する。

10は大形の台付甕である。残存率が低く復元実測である。口縁部は幅広で、端部は丸い。胴部は最大径が中位にありかなり長胴である。小さい台部は緩やかに広がり端面を作出する。外面調整は口縁部縦位ハケ、胴部斜位ハケ、台部縦位ハケである。内面調整は口縁部横位ヘラミガキで光沢を持つにいたる。胴部内面は器面が荒れ不鮮明であるが、部分的にハケが認められる。胴部内面の2箇所接合痕が認められた。

11は壺形土器の胴部と思われる。口縁部を欠損する。最大径を中位に有し算盤玉状を呈する。外面調整は横位ハケ、内面は口縁部との接合部に指頭圧痕を明瞭に

第17図 K-7グリッド遺物集中区



残し、輪積み痕も認められる。

12は甕形土器もしくは鉢形土器の底部と思われる。外面はハケメ調整されるがハケメ状工具の単位はおおよそ3本/4cmと非常に粗いものである。

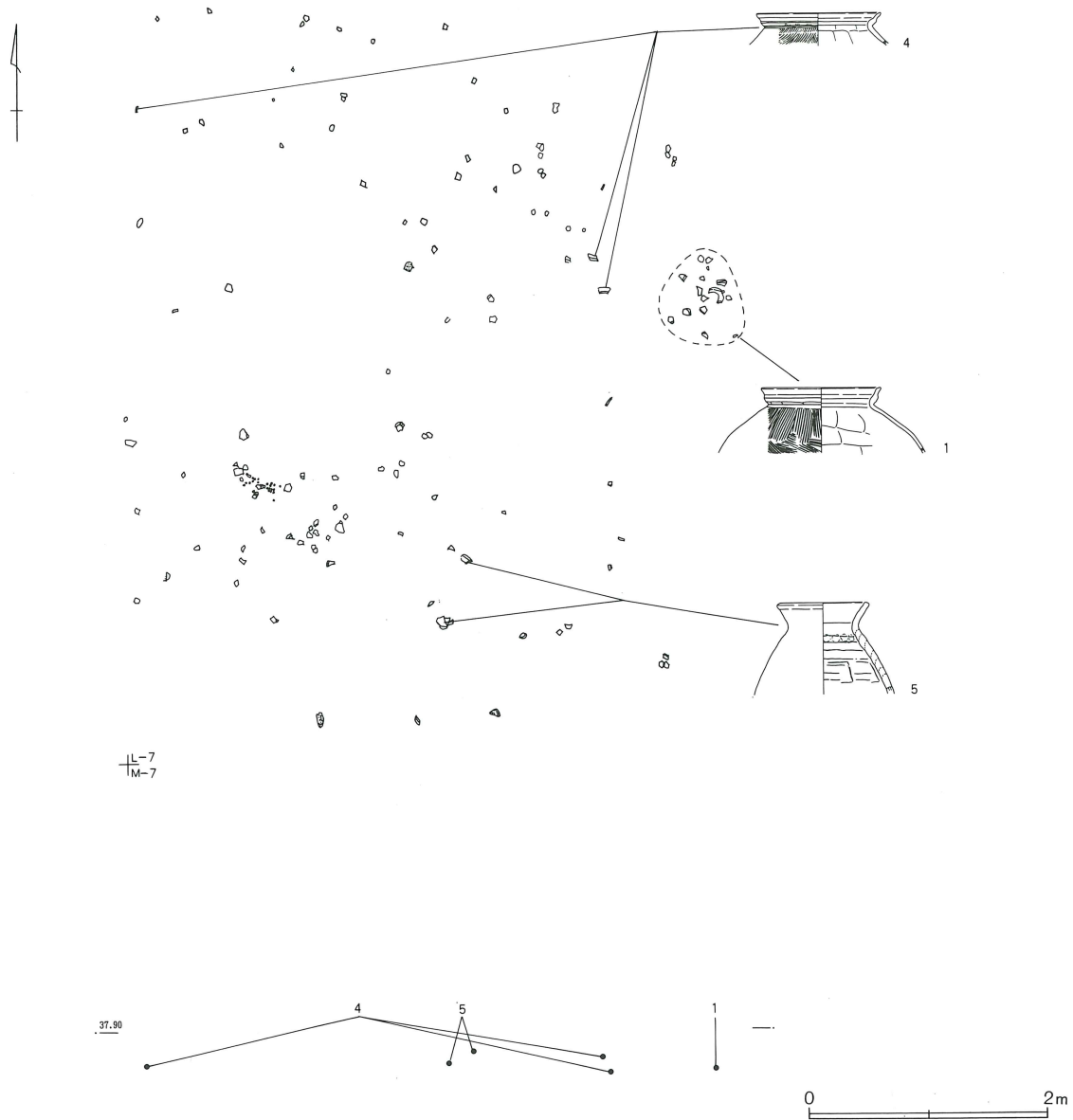
13は鉢形土器である。屈曲する口縁部と丸みのある胴部からなる。口縁部内外面には緩やかな段を有するが器壁は厚い。端部は丸く収まる。

14は口径18.4cm、器高18.5cmのやや大形の高环形土器である。下に稜を有する坏部と中実の脚部からなる。坏部底面は約0.3cmと非常に薄く成形される。坏

部内面には明瞭な稜を有さず、大きく外傾する。口縁端部は小さく立ち上がる。柱状の脚部から緩やかに広がり厚みのある端部に至る。端部は凹線状をなすのが特徴である。調整は脚部外面が縦位ヘラナデ、脚部内面がラセン状のヘラナデと思われるが全体的に器面が粗れ不明瞭である。鈍橙色を呈する。

いずれの土器も帰属時期は古墳時代前期に比定されるが、上記したように遺構が検出されなかったため同時期の共伴か否かは不明である。

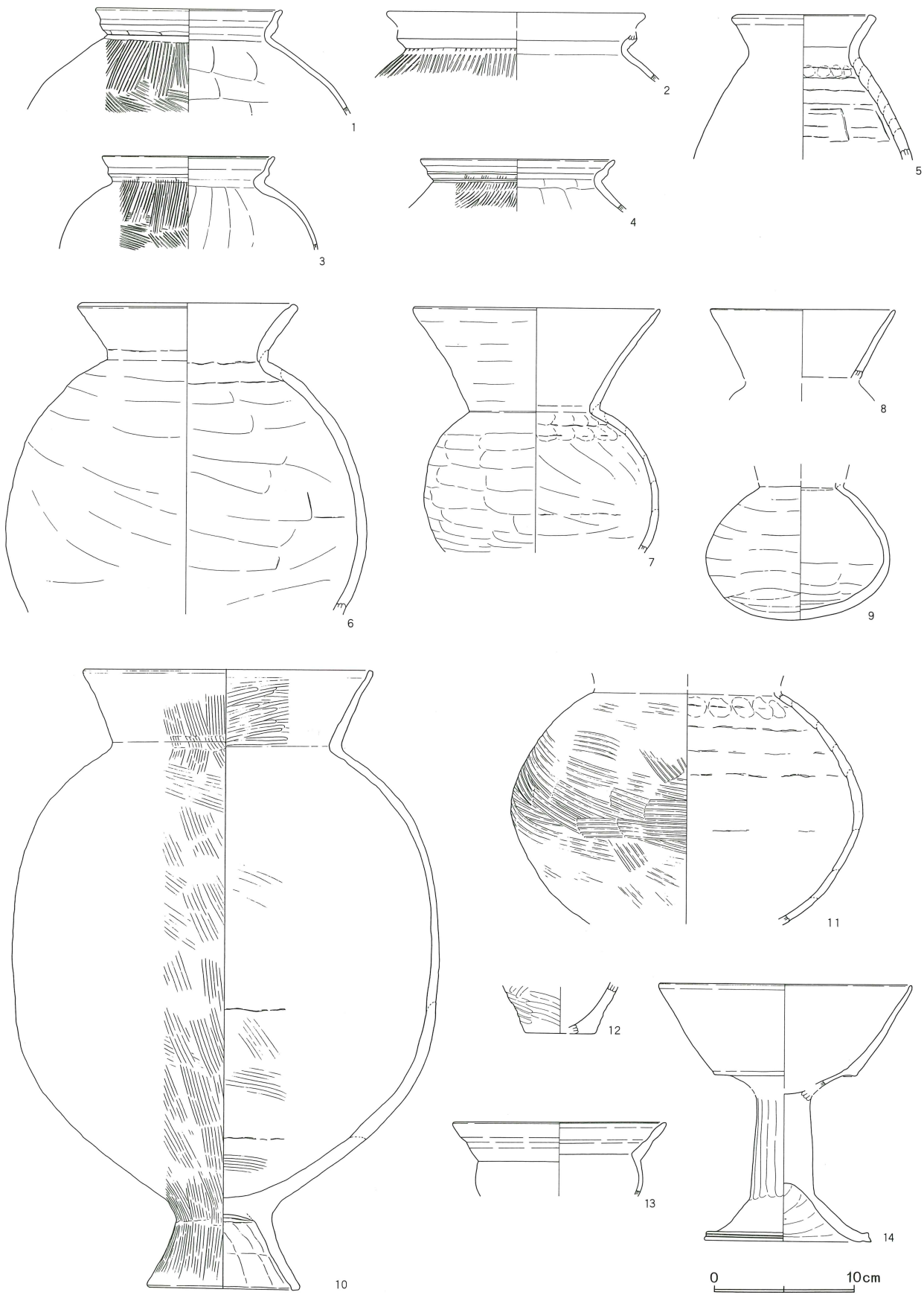
第18図 L-7グリッド遺物集中区



古墳時代前期 遺物集中区出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	S字甕	13.6			BCH	A	赤	75	L-7 頸部外面棒状工具痕
2	S字甕				BCGH	B	橙	25	K-7
3	S字甕	(12.4)			CDH	A	明赤褐	30	K-7
4	S字甕	(14.0)			BCGH	B	橙	15	L-7
5	壺	10.4			BCGH	A	橙	80	L-7 胴部外面ヘラナデ
6	壺	(15.8)			CDGH	A	明赤褐	60	K・J-7 胴部外面ヘラナデ
7	壺	17.8			CEH	A	橙	85	J-6
8	壺	13.4			BCGH	C	鈍橙	80	K-7 胴部外面ヘラナデ
9	壺				CDH	A	赤褐	90	K-7
10	台付甕	20.8	44.6	11.0	CEH	B	鈍赤褐	45	K-7
11	壺				CEH	A	赤褐	50	K-7
12	甕			(5.0)	BCEGH	C	鈍橙	30	K・L-7
13	鉢	(15.4)			CG	B	橙	65	K・L-7
14	高坏	18.4	18.5	(12.0)	CGH	B	鈍橙	75	K-7 脚端部沈線状 器面磨耗

第19図 古墳時代前期の遺物



(2) 古墳時代住居跡群

本報告では記載の便宜上、住居跡を7群およびその他の住居跡に分割する。設定する住居跡群は、重複関係を最重視したものであり、時期差は考慮していない。また国道17号関連の調査区、岡部町教委の調査区から検出されたものも群設定の対象外とする。

また遺構番号は、将来の資料活用を考慮して発掘調査時の番号をそのまま使用している。そのため欠番の住居跡もある。

隣接する住居跡であっても番号が離れているものが多い。これは確認面の標高が、近接している現水田面からおよそ0.7m程低いため、湧水の影響が甚大で、条件の良い遺構から発掘調査を実施したからである。

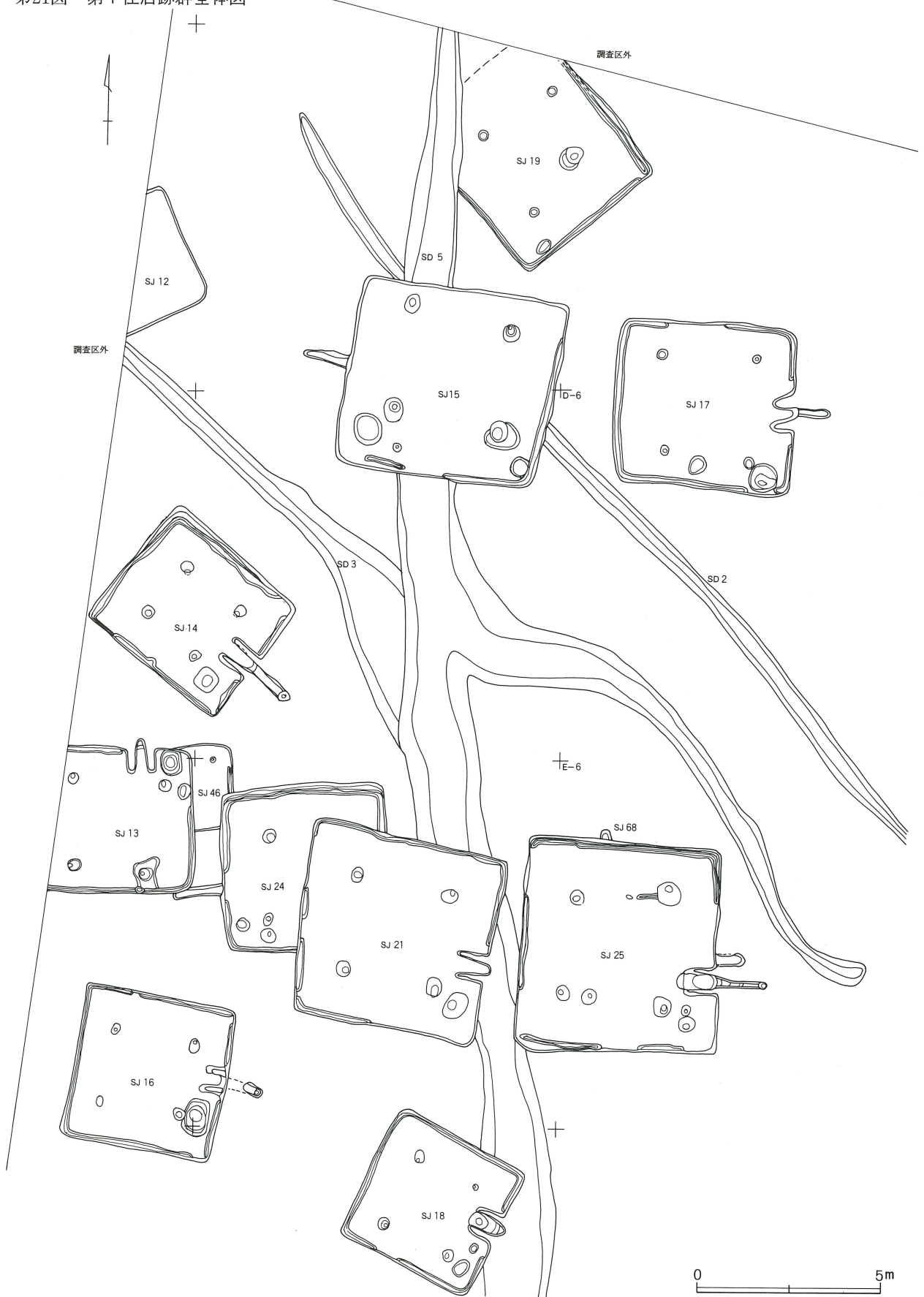
第20図 住居跡群分割図



第1表 住居跡群構成表

1群	2群	3群	4群	5群	6群	7群	その他
12	22	59	41	48	78	3	51
19	23	36	38	47	77	31	66
15	20	67	65	53	74	32	62
17	30	34	27	35	82	75	64
14	37	52	28	69	83	79	63
13	45	9	58	70	55	85	60
46	56	6	5	91	84	86	89
21	42	33	57	44	81	73	
24	50	29	8	54	80	1	
18	71	39	26	61		90	
16		40	7	49		72	
25		10	2				
68		11	43				

第21図 第I住居跡群全体図



(3) 第1住居跡群

第1住居跡群は調査区北西端に位置する。西側は隣接して町教委調査区である。北側は昭和62・63年度の一般国道17号深谷バイパス建設に伴う発掘調査区である。

本群の遺構確認面の標高はおよそ37.9mである。第15号住以北の確認面には直径1cm～拳大の礫が露出しており、時期は不詳であるが、旧河道が付近に存在していたと思われる。

12軒の竪穴住居跡を本群とする。住居跡同士の重複関係は他の住居跡群と比較するとそれほど多くなかった。本住居跡群内での遺構重複関係は、46号住→13号住、46号住→24号住、24号住→21・46号住、68号住→25号住である。第2号溝は出土遺物、覆土等から古墳時代後期に帰属するものであるが、第15号住居跡よりも新しい。なお本住居跡群中を南北に通る第3・5号溝からは近世の遺物が出土した。

本群南側からは土壌等がやや密集して検出され、さらにその南側は古墳時代後期に帰属する第1号溝に画されるがごとく第5住居跡群が分布する。

本群中の住居跡を概観すると、いずれも方形のプランを有する。また北側にカマドを有する住居跡が少なく、大半が東、西側に構築されていた。なお25号住壁際からは計3箇所の煙道が検出されたが、2基を25号住に帰属するものとし、1基を68号住とした。

柱穴はすべて立ち割り精査したが、地山に含まれる礫の影響のためか他住居跡群のものと比較すると概ね浅かった。

出土遺物を概観すると、小形の有段口縁杯や北武蔵型杯は出土しておらず、長胴甕も胴部が比較的張るものが多く、口縁部も第12号住居跡出土遺物を除くと大きく外反するものはない。隅カマドを有する住居跡がないことから本群中には本集落跡を構成する新相の住居跡は分布しなかったと言える。

第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	甕	(21.2)			BCEGH	C	鈍褐	15	

第12号住居跡 (第22図)

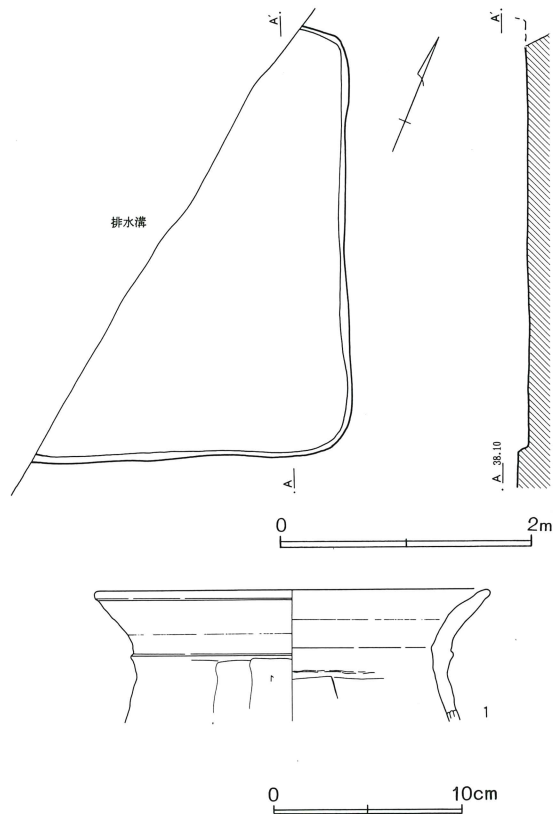
第12号住居跡はC-4・5グリッドに位置する。本調査区北西端に位置し、排水溝に壊されていたため、遺存状況は悪く、残存壁高も約0.08mと浅かった。南北軸方向はN-22°-Wを指す。

南北軸長は推定3.40mと小形である。ややコーナー部分が円みを帯びるが、住居跡形態は長方形と推定される。床面には地山に含有される径3cm程の小円礫が露呈していた。カマド、柱穴等の付属する施設は検出されなかった。

出土遺物 (第22図)

出土遺物は僅少で、図化成し得たのは覆土中から出土した1の甕口縁部のみである。残存率が低く、流れ込みの可能性が高い。

第22図 第12号住居跡・出土遺物



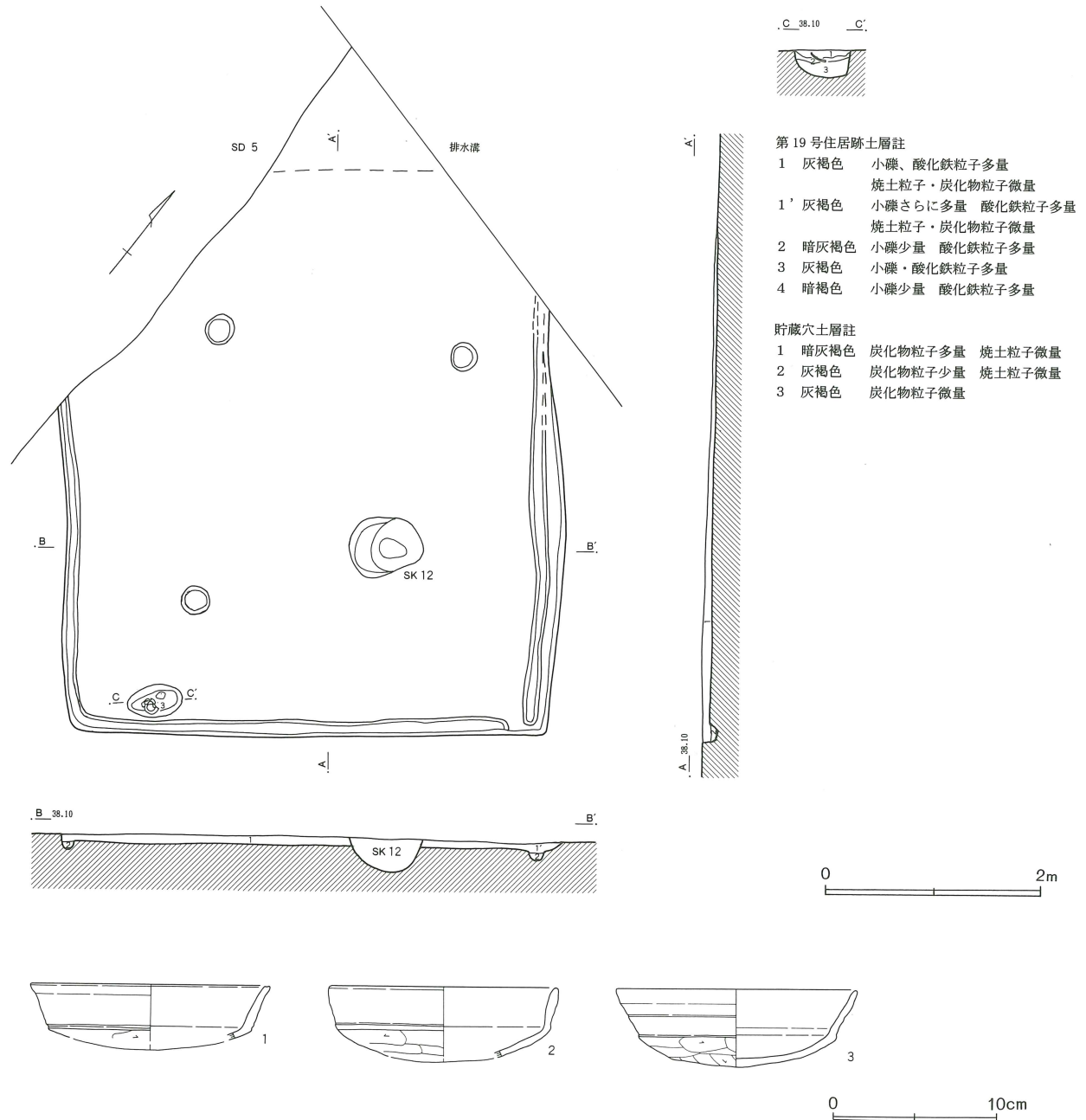
第19号住居跡（第23図）

第19号住居跡はC-5・6グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第5号溝に北西コーナーを壊され、第12号土壇に床面を一部壊されていた。北東コーナー部は排水溝に壊されていた。

南北軸方向はN-39°-Wを指す。遺存状況は悪く北壁は削平により検出できなかった。カマドも北壁に構築されていた可能性がある。

平面形態は方形と推定される。南北軸長は推定5.20m、東西軸長は4.60mである。壁際には壁溝が巡るが

第23図 第19号住居跡・出土遺物



第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(14.8)	(5.0)		BCEGH	B	橙	15	
2	坏	(14.2)	(4.6)		BCEFGH	B	鈍橙	15	
3	坏	14.9	4.8		BCEGH	B	鈍褐	95	ピット中

北壁側からは検出されなかった。

主柱穴と想定されるピットは3基検出したが、いずれも深さ0.20m内でやや浅い。地山に礫を多量に含む地形的側面の影響が考えられる。南西コーナー部より検出したピットは径0.50×0.30m、深さ0.25mである。埋土上層は炭化物粒子を多量に含有していた。

出土遺物（第23図）

遺物の出土は少なく図化成し得たのは坏3個体のみである。3は壁際のピットの上層から検出された有段口縁坏である。

第15号住居跡（第24図）

第15号住居跡はC・D-5グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第2号溝、第5号溝に壁上部を一部壊されていた。主軸方向はN-78°-Wを指す。

わずかに歪むが方形を呈する。主軸長5.76m、副軸長は5.25mである。東、南壁際からは断続した壁溝が検出された。

覆土は大きく2層からなる自然堆積である。第1層は多量の小礫を含有していた。

主柱穴の深さはP1=0.50m、P2=0.55m、P3=0.55m、P4=0.79mであり覆土は抜き取り痕を示していた。柱間はP1-2.79m-P2-2.89m-P3-2.93m-P4-2.90m-P1であり、住居跡のやや北側に偏るもののほぼ等間隔である。P2、4の底面は中央が窪む。柱痕に対応する可能性が高い。

貯蔵穴は径0.86×0.77m、深さ0.12mであり覆土に炭化物および焼土を含有する。また南東コーナー部からは円形の深さ0.08mのピットが検出された。

カマドは西壁中央に構築され、煙道部長1.20m、煙道部幅0.25mであった。袖は検出されなかった。燃烧部は床面とほぼ同じレベルと想定される。被熱硬化面等はなかったが、底面が水平の煙道部の覆土には多量の焼土ブロック、炭化物を含有していた。また燃烧部に対応する箇所からは灰層が検出された。

出土遺物（第25図）

遺物は覆土中出土が主体を占めるが、概して残存率は悪かった。組成については坏は蓋模倣、身模倣、有

段口縁坏、比企型坏の可能性のある10などバラエティに富む。甗は12の小形の多孔式、単口式と思われる13が出土しているが、いずれも残存率は低い。甕は出土しなかった。土錘は破損品が2個体出土した。

第17号住居跡（第26図）

第17号住居跡はC・D-6グリッドに位置する。主軸方向はN-95°-Eを指す。

主軸長4.95m、副軸長4.53mであり方形を呈する。

覆土は大きく3層からなる自然堆積を示すと考える。壁際には不規則に途切れる壁溝が巡る。

主柱穴の深さはP1=0.06m、P2=0.09m、P3=0.28m、P4=0.36mである。柱間はP1-2.33m-P2-2.62m-P3-2.65m-P4-2.84m-P1である。

貯蔵穴は径0.75×0.75m深さ0.43mであった。

カマドは燃烧部長0.70m、同幅0.26m、煙道部長0.82m、同幅0.15mであった。燃烧部は床面から僅かに落ち込み、急激に立ち上がり煙道部に至る。煙道部底面は水平であった。袖の依存状況は良好であった。カマド内部から遺物は出土しなかった。

出土遺物（第26図）

遺物は覆土中から少量出土した。1は器面状態が悪く、赤彩は認められなかったが、比企型坏である。口縁部上位で強く屈曲する。口縁端部内面は僅かに沈線状となる。2は甗の口縁部である。頸部内面はミガキ調整される。

第14号住居跡（第27図）

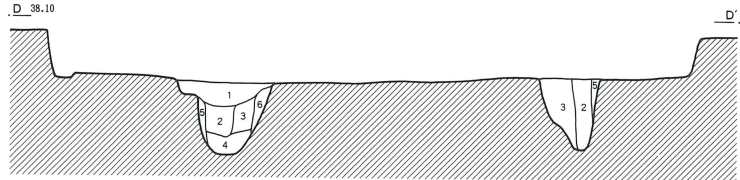
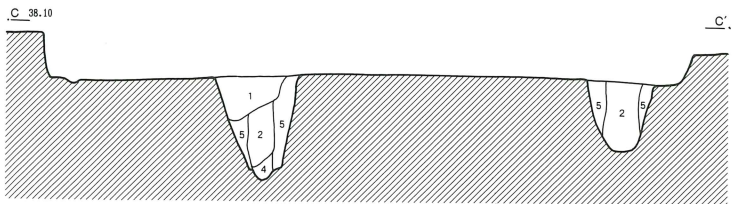
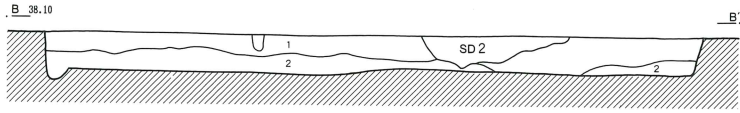
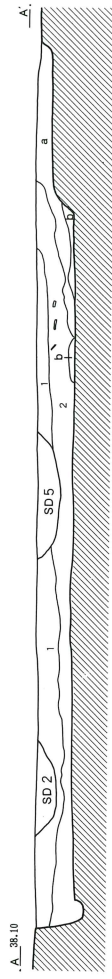
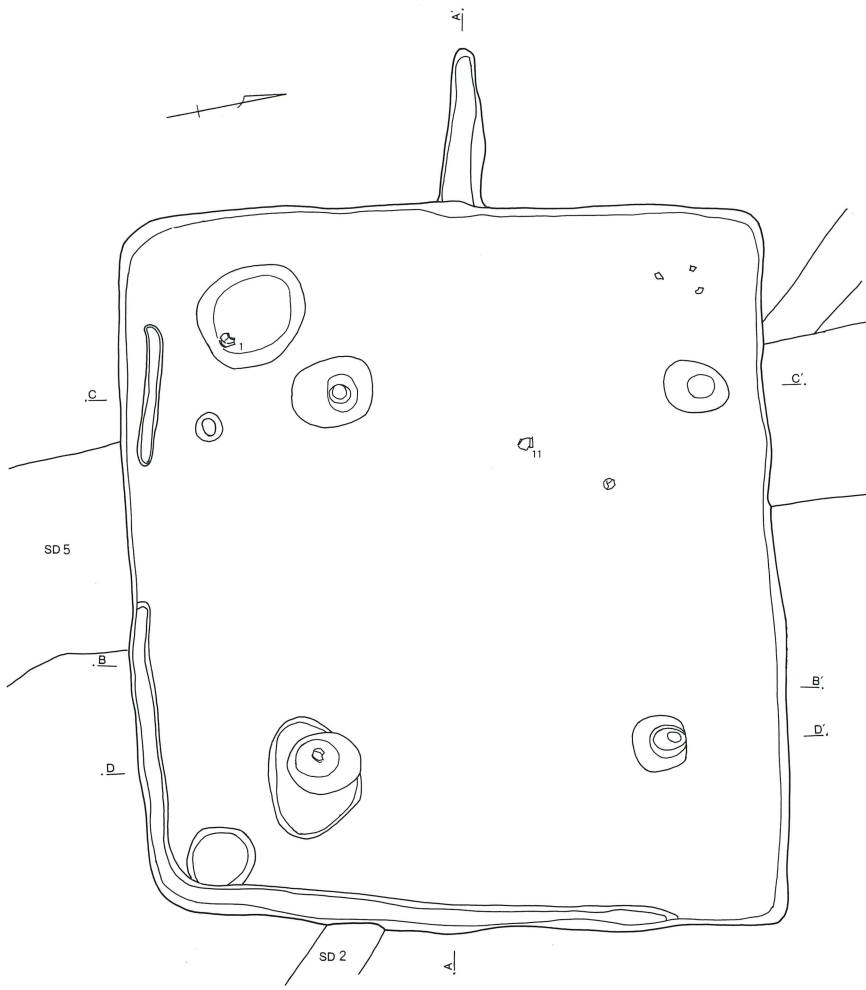
第14号住居跡はD-4・5グリッドに位置する。主軸方向はN-132°-Eを指す。

主軸長4.48m、副軸長3.90mであり、やや縦長の方形を呈する。遺構の遺存状況は良好で、残存壁高0.41mであった。壁際には不規則に途切れ、幅もやや不統一な壁溝が巡る。

覆土は概ね自然堆積を示すと考えるが、第3層は炭化物粒子を多量に含有していた。

主柱穴の深さはP1=0.39m、P2=0.38m、P3=0.30m、P4=0.55mである。柱間はP1-1.72m-

第24図 第15号住居跡



第15号住居跡土層註

- 1 灰褐色 礫多量 焼土ブロック少量
- 2 灰黄褐色 黄白色ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量

柱穴土層註

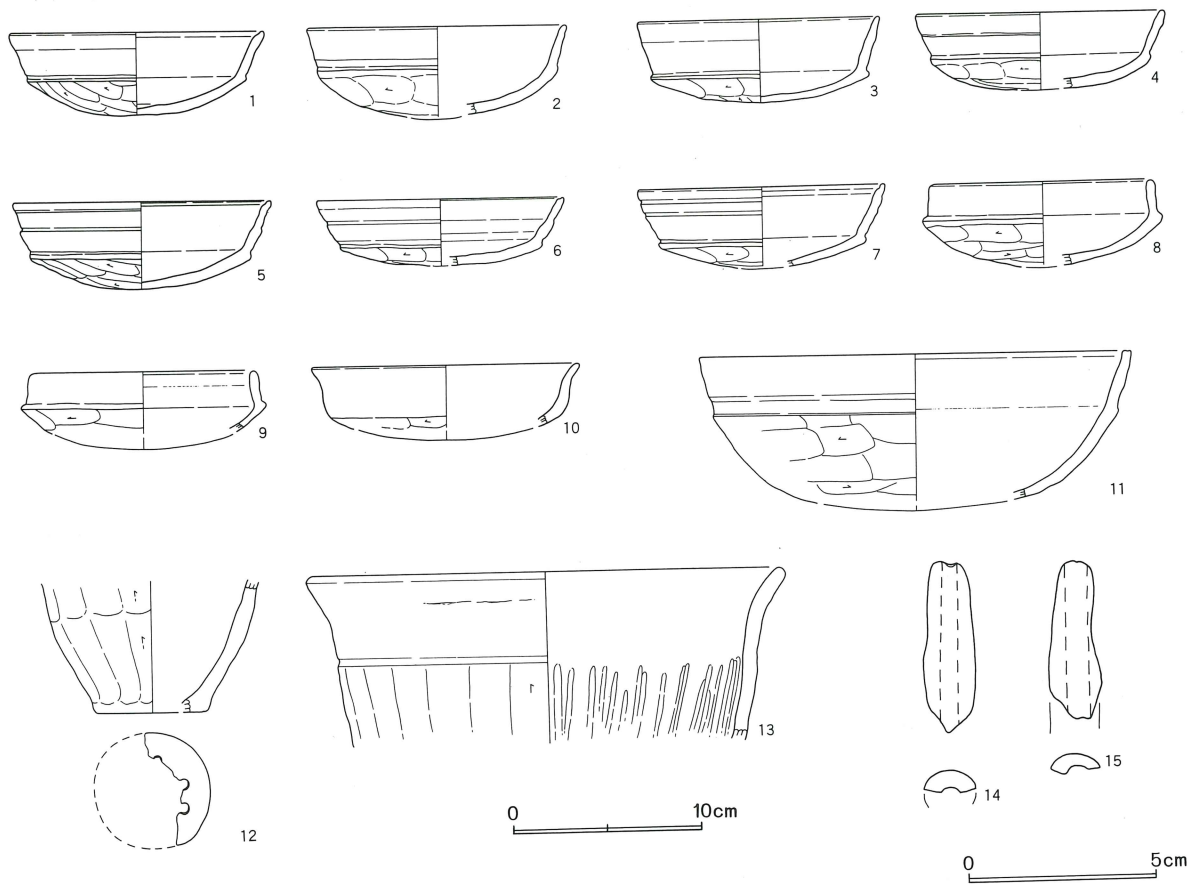
- 1 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物少量 礫やや多量
- 2 暗灰褐色 焼土ブロック・礫少量
- 3 灰白色 焼土ブロック少量
- 4 灰白色 礫・炭化物粒子少量
- 5 灰黄褐色 灰色粘土少量 しまり強し
- 6 灰黄褐色 灰色粘土・焼土ブロック少量 礫多量

カマド土層註

- a 暗灰褐色 焼土ブロック・炭化物粒子多量
- b 暗灰褐色 炭化物少量 灰多量 (灰層)



第25図 第15号住居跡出土遺物



第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
1	坏	(13.8)	4.4		BCDEGH	C	橙	45	貯蔵穴覆土中	
2	坏	(13.8)	(4.9)		BCEGH	B	橙	20		
3	坏	(13.0)	4.5		BCEGH	C	鈍黄橙	50		
4	坏	13.4	(4.2)		BCEGH	C	橙	80		
5	坏	13.8	4.6		BCEGH	A	橙	85		
6	坏	(13.2)	(3.5)		BCEGH	B	橙	40		
7	坏	(13.2)	(4.4)		CDEGH	B	鈍黄橙	20		
8	坏	(12.1)	(4.5)		BCDEGH	C	灰褐	25		
9	坏	(11.8)	(4.1)		BCEGH	C	橙	35		
10	坏	(14.4)	(4.0)		BCGH	B	橙	10		器面磨耗
11	鉢	(22.6)	(8.3)		BCGH	C	鈍黄橙	15		
12	甌			(6.2)	BCH	B	橙	35		多孔
13	甌	(25.6)			BCEGH	B	橙	25		
14	土錘	長4.45	径1.55	重(4.06)						欠損
15	土錘	長(4.18)	径(1.41)	重(3.61)						欠損

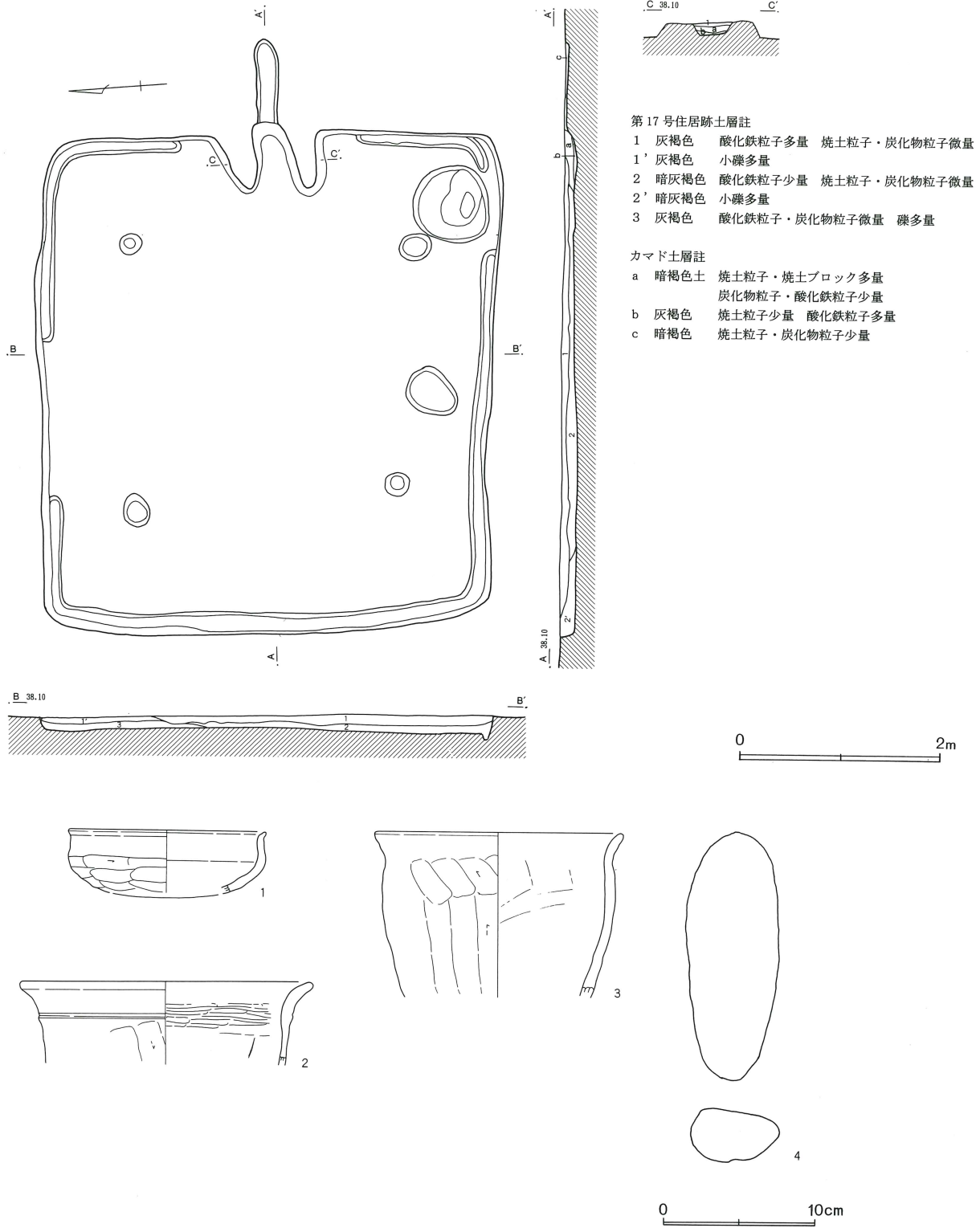
P 2 - 1.56m - P 3 - 1.78m - P 4 - 1.66m - P 1 であった。

貯蔵穴は平面形態隅円方形を呈し、径0.60×0.63m、深さ0.45mであった。

カマドは燃焼部長1.02m、同幅0.34m、煙道部長

1.38m、同幅0.20mであった。灰層の堆積は顕著であった。床面と同レベルの燃焼部から緩やかに立ち上がり煙道部に至る。煙道部は緩やかに傾斜し、先端にはいわゆる煙出しピットが掘りこまれていた。袖の遺存状況は良好で内面は被熱硬化が顕著であった。なお左

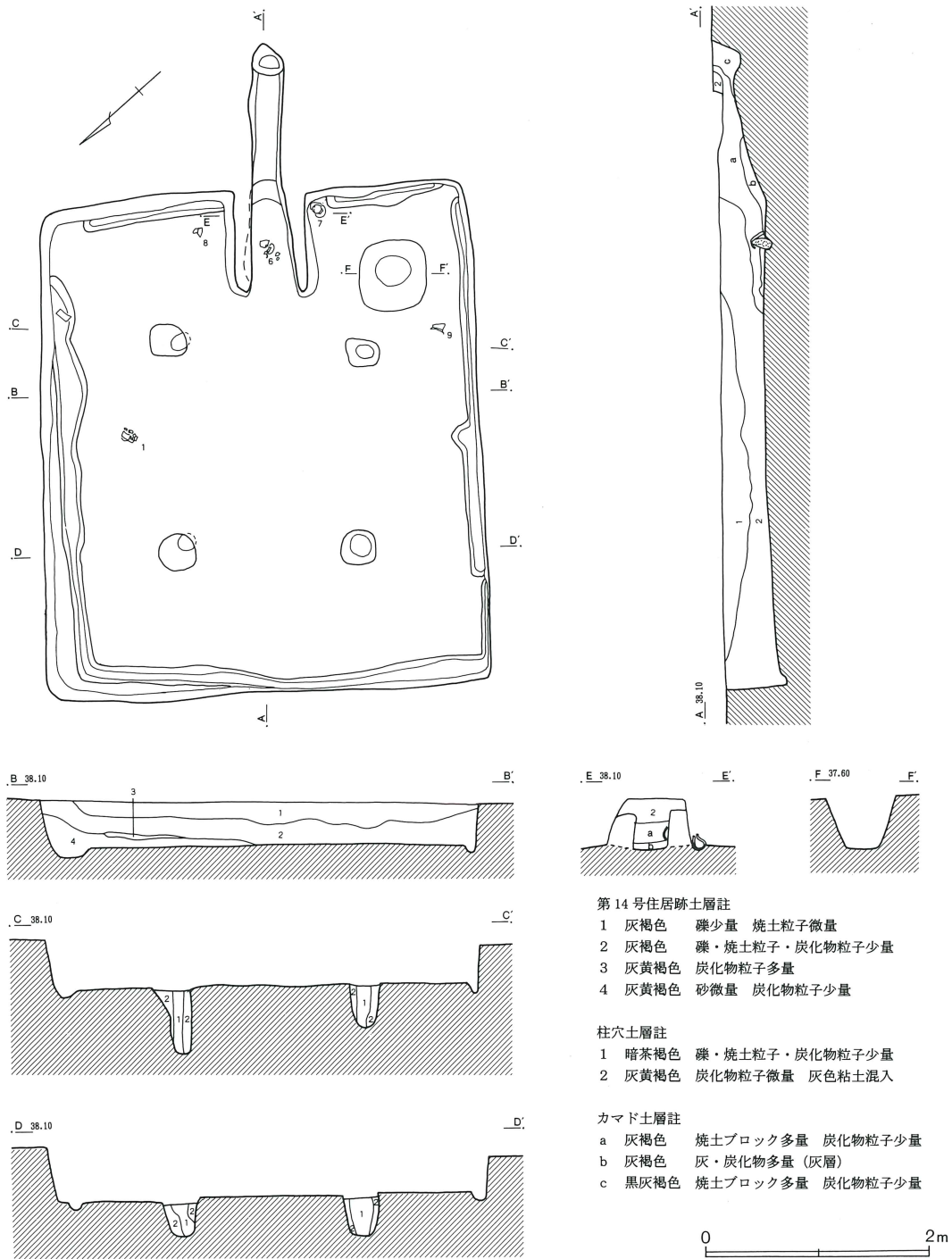
第26図 第17号住居跡・出土遺物



第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	(13.2)	(4.4)		CDFH	A	橙	30	比企型(器面磨耗により赤彩不明) 胎土分析 NO12
2	甑	(19.6)			BCDEGH	C	鈍黄橙	20	口縁部内面 横位ヘラミガキ
3	甕	(16.6)			BCEGH	C	橙	15	
4	編物石								1個体

第27図 第14号住居跡



袖内面はオーバーハングしていた。燃烧部には石製の支脚が埋め込まれており、それを覆うように6の鉢が逆位で検出された。甕等の出土はなかった。

出土遺物 (第28図)

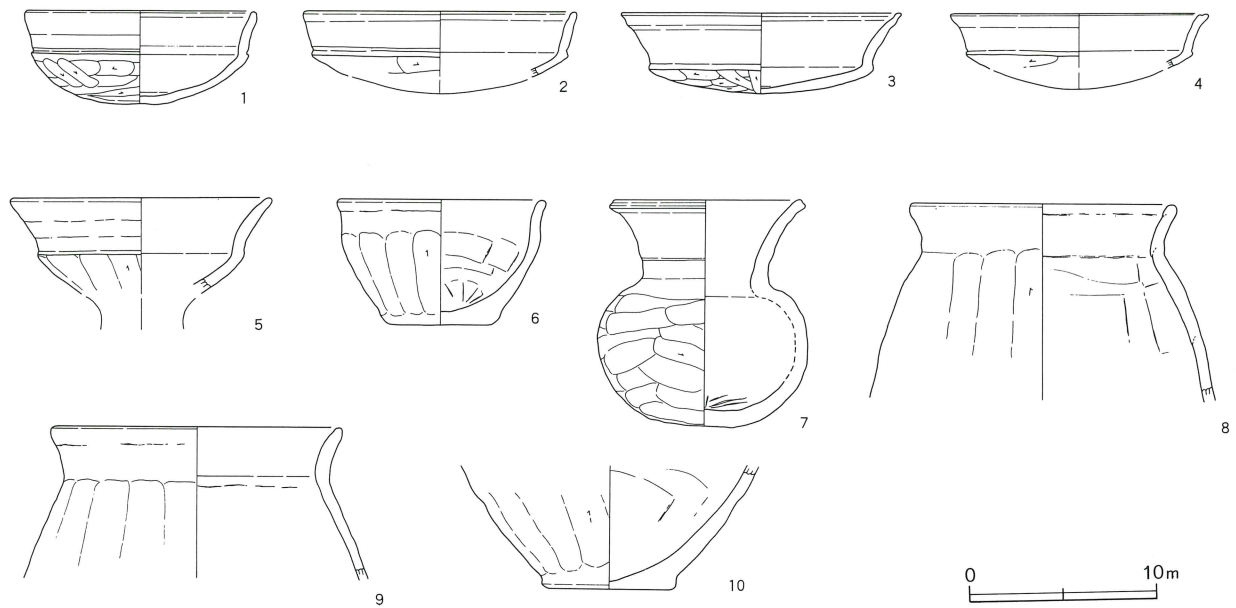
少量の遺物が床面直上から出土した。坏はいずれも蓋模倣であるが、口縁部内面もしくは端部が鈍く凹状

を呈する。7の小形の壺は右袖脇の床面直上から出土した。ほぼ完形で口縁端部は凹状を呈する。

第13号住居跡 (第29図)

第13号住居跡はE-4グリッドに位置する。他遺構との重複関係は第46号住居跡を壊していた。また排水溝で壊されていたため西壁は検出できなかった。主軸

第28図 第14号住居跡出土遺物



第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	坏	12.5	5.0		BCEGH	B	橙	80	
2	坏	(14.6)	(4.4)		BCEGH	A	明赤褐	20	
3	坏	(15.0)	4.3		BCEGH	A	明赤褐	15	カマド
4	坏	(13.8)	(4.0)		BCEGH	A	明赤褐	15	
5	高坏	(14.0)			BCGH	B	橙	35	
6	鉢	6.0	6.6	5.7	BCEGH	B	橙	60	カマド
7	壺	10.4	12.1	3.5	BCEGH	B	橙	95	端部沈線状
8	甕	(14.4)			BCEGH	C	鈍黄橙	20	
9	甕	(15.6)			BCEGH	B	橙	35	
10	甕			7.2	BCEGH	A	鈍赤褐	35	

方向はN-3°-Eを指す。

主軸長3.97m,副軸長は推定で3.76mであり、方形を呈する。貯蔵穴付近以外には壁溝が巡る。

覆土は自然堆積を示すと考えるが、炭化物の含有が認められた。焼土も床面直上から検出されたが、床面には被熱痕は認められなかった。

主柱穴の深さはP1=0.48m、P2=0.84m、P3=0.45m、P4=0.59mである。柱間はP1-2.50m-P2-2.00m-P3-2.43m-P4-2.50m-P1であった。P3の南側肩部からは、白色粘土が検出された。

底面円形の貯蔵穴は径0.58×0.68m、深さ0.31mであり、明瞭な段を有する。南壁際P2周辺は不定形に0.05m程低くなっており、その底面からは炭化物、焼

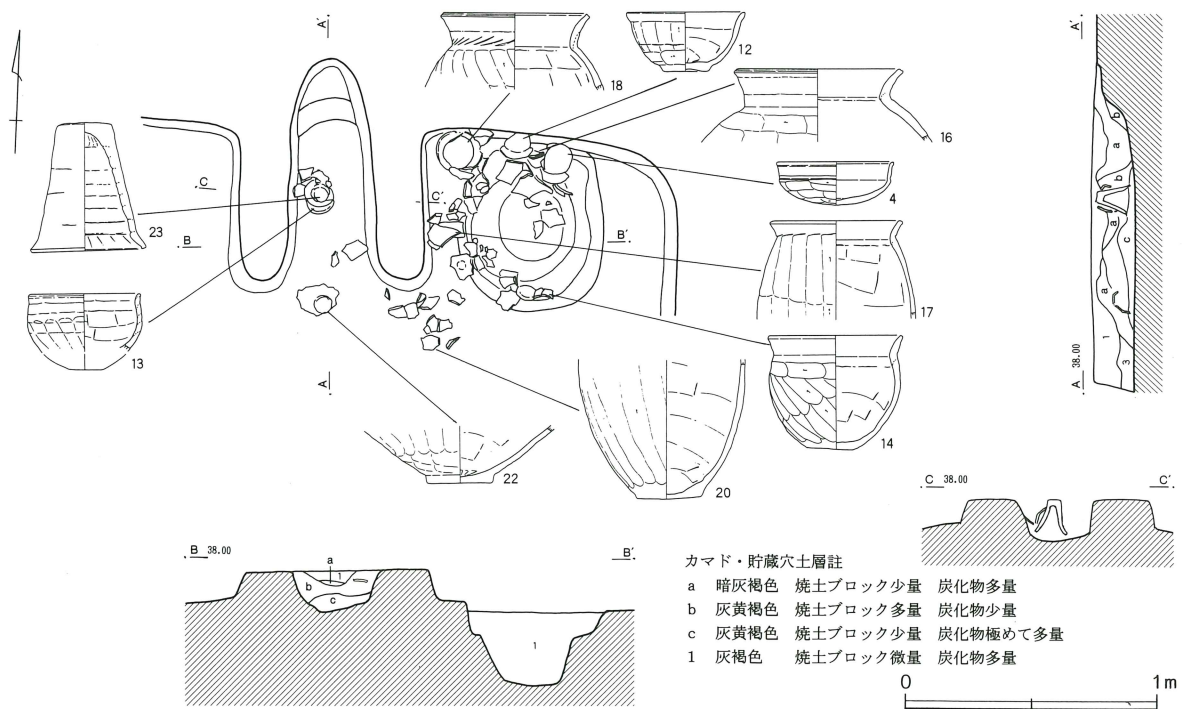
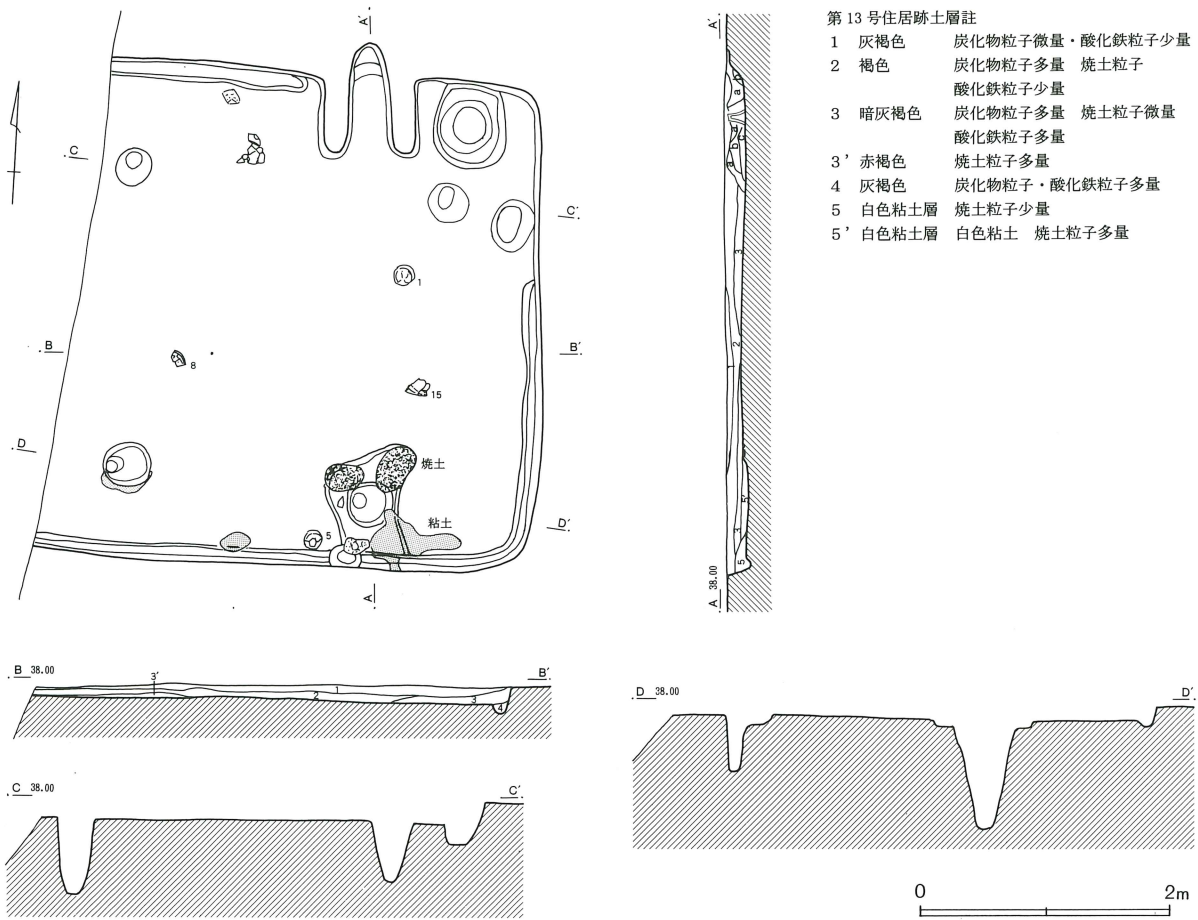
土が検出された。また部分的に被熱した白色粘土も検出された。いずれもP2を避けるように分布していた。なお周辺からは、粘土塊や鉄滓等の遺物は出土していない。

カマドは燃焼部長0.76m、同幅0.26m、煙道部長0.15m、同幅0.18mであり、煙道部のほとんどは削平されていたと考えられる。床面と同レベルの燃焼部から急激に立ち上がり煙道部に至る。袖内面の被熱硬化は顕著であった。

出土遺物 (第30図)

遺物は貯蔵穴肩部周辺から集中して出土したが、貯蔵穴底面からの出土はなかった。18の甕口縁部は床面直上で逆位で出土した。転用器台の可能性もあるが、割口は不均一である。カマドからは23の土製支脚を覆

第29図 第13号住居跡・カマド



第30图 第13号住居跡出土遺物

